海國兵談序

今之所謂兵也者言用兵之理今之所謂武備也者備之之事是也兵之屬於理備之屬於事時勢使然耳所謂武備也者攻守之具則古論已至乎其測區域廣狹山河險易古今異同人物強弱天度寒暄敵國大小遠近緩急利不利衰旺各從其權而制其宜徐謀豫實必無有遺漏也而後其用爰備焉不啻是也豫虞匪懈講習之務益久益精

硏究周致無所不至雄武俠烈之風不撓則丈夫無有反心化外慴伏而莫或敢犯其如此而至萬萬世使人民永莫受兵革亂離之苦者也所得而期矣業亦大也哉矣凡兵爲臨時機備爲太平業太平時武備不張則兵無所講兵理不明則武備無所張事理相待而已矣我

神祖開業以來昇平既久中外無事世之言兵者唯理之究卒無所施今也實 國家備于武之時哉而今之備之者徒談其理而不按其方率乎舊儀而忽乎講習流風漸移因循苟且其終歸廢弛使兵之與武備均屬空理可勝嘆耶亦猶兵革亂離閑人情懈于文學時勢使然耳兵爲臨時機備爲太平業太平時止備爲屬于事舍事取理未見其可雖然時勢之使然也自非大勉強斷而不能及于此也予友林子平者慷慨之士也性恬澹寡欲心存大義其親族略多縉紳子平蔑視不爲家

酷好跋渉凡　邦域内經歷殆徧其自處常如在兵革間藍縷糲食草行露宿陶陶而自適云嘗憤然發志困學有年著書滿架皆言當世之策此編名曰海國兵談其意以為我　國海國也要在備於海寇故以目焉其論説確實激切如目覩其人傍據海外奇策古今未嘗見聞者出之足以觀我　國防禦之大方其所志可謂偉矣當今之世豫寔匪懈講習之務益久益精研究周致無所不至則所謂以至萬萬世使人民永莫罹兵革亂離之苦者其在乎斯歟其在于斯歟

天明丙午夏五月念六仙臺工藤球卿撰

海國とハ何の謂ぞ曰地續の隣國無して四方皆海ニ沿ル國を謂也。然ルニ海國ニハ海國相當の武備有て唐山の軍書及ヒ日本ニて古今傳授せる諸流の説ト品替れる也此わけを知されば日本の武術とハ云かたし先海國ハ外寇の來り易キわけあり亦來り難キいはれあり其來り易キといふハ軍艦ニ乗して順風を得レば日本道二三百里の遠

海も一二日に走リ来ル。此如ク来リ易キわけあるゆへ此備を設ざれは叶ざる事也。又来リ難しといふいはれは四方皆大海の険ある故妄リに来リ得さるなり。然かれども其険を恃て備に怠ル事なかれ。是に付て思へは日本の武備は外寇を防ク術を知ルこと指当ては急務なるべし。さて外寇を防クは術は水戦にあり。水戦の要は大銃にあり。此二ツを能調度する事

日本武備は正味にして唐山韃靼等の山國と軍政の殊なる所なり。これを知て而して後陸戦の事に及ブべし。惜哉大江匡房を始として楠正成。甲越二子の如キ世に軍の名人と称せるも其根元唐山の軍書を宗として稽古ありし人々なれは皆唐山流の軍理のミ傳授して海國の議に及べる人なし。是其一を知て其二を知ざるに似たり。今小子海國兵談を作て水戦を以て開巻第一義とス。是海國武備の根本なるがゆへなり。

日本の武備ハ此水戦を第一トして其上ニ又一ッの心得あり其心得トいふハ古の唐山今の唐山ト地勢人情ともニ相違したるヿけ也。されバ　日本開闢以来。外國より来り襲し事ハ唐山の元（ゲン）の時代度々軍を仕懸しが就中弘安四年ニハ大軍ニて押来りしかども幸ニ神風ニ逢て鏖（ミナゴロシ）せられしなり是元（ゲン）君ハ北種ニして出て唐山を押領したる人なれバ元の代ハ唐山ト北狄ト一躰ニ成て北邊の軍止果（ハテ）たり然ル故ニ遠く兵馬を出スにも後（ウシロ）ニ碍（サハリ）なかりしゆへ度々軍を仕懸し。是ニ付て唐山の時勢を考見ルべし三代ハ言ニ不及秦漢迄ハ日本の廣狹并ニ海路等のこと詳ニ知得ざりし、唐の代ニハ屢　日本と往来して海路國郡等の事迄詳ニ知たれども互ニ好ミ深かりしゆへ侵し襲フニ不及宋ニ至てハ其朝の風儀懦弱なりしゆへ是亦来り得ざりし也扨宋を滅したる者ハ北種の蒙古よりして即チ元

也。元の兵馬度〻日本江來シ事ハ上に云シ如ク唐山北狄一躰に成て其境目(サカイメ)の軍。止果ある故遠ク兵馬を出シても後(ウシロ)の心碍(サハリ)無シ故也其後明の世祖。元を滅シて唐山を再興シ其政事柔弱なりしバ能一統の業を成せり此代日本を侵掠せるの議ありといへとも此種の大敵日〻月〻に襲懸(オソヒ)てしかく遠海を絶(ワタツ)て來ルに遑(イトマ)なし其上。太閤ハ猛威。朝鮮を陷(オトシイレ)シて北京江入へき勢ヒに辟易して侵シ伐へき原なりてし間に亦韃靼に亡されて康熙以來唐山韃靼亦一躰に成て今ハ愈能一統シ北邊愈能太平に成レり此故に遠ク兵馬を出スにも後の心碍(サハリ)なし其上康熙。雍正。乾隆の三主各文武剛敵にして能。時勢に達シ能唐山を手に附ありし必明(ミン)迄ハ唐山と思フ事なかりし。されバ今の清を以て古の唐山に競シても土地も古の唐山に一倍し武藝も北風を傳へて能修練シ情欲も北習を承て剛強に移り行故。終(ツイ)に北狄貪賂

の正根次第に唐山に推移りて其仁厚の風儀も漸々に消滅し且亦世々の書籍も次第に精ク成行。亦　日本ト往來も繁ク其上。人心日々に發明すれバいまだ唐山にて日本の海路國郡等も微細に知得あり。竊に憶へも若クハ此以後の清主（カラノキミ）無内患の時に乗じ且ツ元（ゲン）の古業を思ひ合せて如何（イカ）なる無主意（ムフンベツ）を起ス間じきにもあらず其時に至ては貪慾（トンヨク）を本トすれど　日本の仁政にも不可懐（ナツク）。又

兵馬億万の多きを恃メも　日本の武威にも不可畏（オソル）。是明迄の唐山と同じからざる所也。又近頃。歐羅巴（エイロツバ）の莫斯哥未亞（ムスカウビヤ）其勢ヒ無雙に起て遠く韃靼の北地を侵掠し此ころハ室韋（シイ）の地方を畧して。東の限り加模西葛杜加（カムレカツトカ）（即カムサスカ之蝦夷ノ東北ニ在）迄押領しあり然ルに加模西葛杜加より東にハ此上。取べき國土なし此故に又西に顧みて蝦夷國の東なる。千嶋を手に入ルべき機（キザ）しあり。ト聞及べて既に明和辛卯の年

莫斯哥未亞より加模西葛杜加江遣し置ル豪傑。バロンマオリツツ。アラアダルハン。ベンゴロウといふ者。加模西葛杜加より船を発して日本江押渡り港〻江下縄して其深サを計りながら日本を過半。乗廻したる事ありて就中土佐の國に於ては日本國に在合。阿蘭陀人江認し書を遺置たる事もある也。是等の事其心根可レ憎可レ恐。是海國なるがゆへに来ル間敷船も来ル人も機轉次第にて心易く来ラるゝなり察スベし。さて海國のことけド唐山の時勢トを弁へ得たる上に又一ッの心得あり其心得トいふハ偏武に不陥して文武両全なるべき事を欲し願フべし。偏武なれバ野へ無智之元より兵者凶器也。然レども死生存亡の係ル所にして國の大事是に過ルものなましゆへ。野にして無智なる偏武の輩に任セ難き事也。此故に　日本ハ古代より都に鼓吹司ト淳和。奨學の両院を置。國〻にハ軍團ト郷

學トを置て皆文武を教られたり又孔子も文武兩全の意を述て有㆓文事㆒者必有㆓武備㆒矣ト宣リ其外黄石公ハ文武相並て國家を經濟すべき趣を述。司馬讓苴ハ治世に戦を不忘ハ國家を保護する道なることを言り。そのほかにハ晋の六卿。齊の管仲。漢の二祖。蜀の孔明。我カ神祖の如き皆兩全の旨を會得したる人々其余。兵を談ずる人。和漢數多あれども皆各其長ずる所のみ傳授して一方ぎゝの兵家なればば兩全トいふべからず且亦戦闘の道。各國土の模（カタ）儀（キ）あり其大槩を論ずる時は日本ハ其軍立小排（ゼリ）合之血戦を主トして謀慮少（スクナシ）只國土自然の勇氣に任セ命を捨て敵を碎く事を第一の戦法とするゆへ。其鋒（ホコ）先ハするとかれども法粗（アラ）きゆへ持重の位を為し難し唐山ハ理ト法トを重して謀計多く。持重を第一義とするゆへ其軍立ハ堂々なれども血戦に至ては甚鈍（ニブシ）。是等の事なり

日本。唐山。兩國

の軍記を讀て味へも其鋭鈍ハ知べし。且寛永の頃。渋田八右衛門。濱田弥兵衛等只九人。臺湾江押渡て阿蘭陀の。ゼ子ラル（城代ノヿ）を擒ニ仕ある例もあり。又安永中。小子肥前の鎮臺館に遊事志ありし頃。崎陽の在館唐人六十一人。徒黨して乱を為ある時吾黨十五人。鎮臺の令を承て相向イ即時ニ六十一人を討破り其楯篭ある紅神堂を毀て帰レり此時唐山人トハ手詰の勝負を為て彼ノ國人の力戦に鈍キ事を親ラ試ミ知レり亦歐羅巴の諸國も大小の火器を専ト志て其外の飛道具甚多ミ尤艦船の制。妙に精クして船軍に長ミあり殊に其國。妙法有て能治メて和親するゆへ。同國攻討事なく只相互に他州を侵掠して己レカ有トする事を世々の勉トして決して同國中にて同士軍をせざる之是　日本唐山等の企及さる所あり兵を提ル者。此三軍情を能會得して臨機應変せば天下に横行すべし抑

日本海國のわけと今は靖（カツ）を古の塘山に優（マサ）レ由へ　日本において油断ありがたきわけと三州各戰闘の模儀（カツキ）に別あるの三説ハ日本前兵家の未發せざるところ之其未ダ發せざるわけハ世々の軍學先生。皆唐山の書に本（モトヅイ）て工夫を附シ由へ自然に唐山流に陥（オチイリ）て却て海國ハ海國の兵制ある事を發明せざる故あるべし今小子始て是を言者ハ深ク患ル所有て。廣ク問切に考て此旨を得たり此旨を得たりといへとも尋常は世人を口外すべからず

も口外をべからざるを謹肅なれどなり小子ハ直情徑行の獨夫なる由へ敢て忌諱を不顧。因て。ベンゴロウ。が事を始とーて都て外寇の來り易きわけを有のまゝに書シて却て海國肝要の武備ハ如此也ト云事を肉食の人々に知らせめんト欲ル故。見聞スル所を纂集（アツメ）シテ此書を作為ス是吾小子。德ヲ不量。位ヲ不計シテ妄患ルニ海國を以てスル由へんなり是僭ラ小

子極テ僭踰也罪ヲ不遁ことを知。然とも人をは不可取。言計（コト）をは不可取。是吾小子。徳ト位トヲ不量計。此書を作為シテ言計（コト）を當世ニ危スル所也。而テ書成て以テ躬ラ珍トス然レとも小子不才也。文献不足。此故ニ字々句をも不成。句々章を不成。觀者讀法（ヨミカタ）ニ苦ムべき事を恐ル。然ト云とも初学の士。端を此ニ開て文以テ戰法を潤色シ。武以テ文華を助ケ闕クの趣を會得シ。文武相兼て其精ニ至ル事を得は即邦家を安シ海國を保護せは一助あるへし竊ニ是ヲ日本武備志ト云とも罪無ン歟只其文の拙を以て其意を害せること無ンことを希而已時

天明六年丙午夏仙臺林子平自序

海國兵談目錄

第一卷
水戰　十四丁
第二卷
陸戰　七十五丁
第三卷
軍法並物見　八十九丁
第四卷
戰畧　百丁

第五巻
夜軍　百九丁
第六巻
撰士并一騎前　百十五丁
第七巻
人數組并人數扱　百三十一丁
第八巻
押前、陣取、備立、備陣、野陣、　百四十丁
第九巻
器械並小荷駄附粮米　百五十二丁
第十巻
地形城制　百六十九丁
第十一巻
城攻并攻具　百八十八丁
第十二巻
籠城并守具　二百三丁
第十三巻
操練　二百二十二丁

第十四巻
武士之本躰並知行割人數積付制度法令之大畧 二百三十二丁
第十五巻
馬之飼立仕込揉付騎射之事 二百五十二丁
第十六巻大尾
畧書 二百八十丁

初巻より第十五巻迄ハ水陸戰鬪（タヽカイ）の事を述あり。畧書ハ文武相兼て國家を經濟し食を足兵を足の義を言て大将の心得として兵の心印トス。讀者身ニ取て工夫を附へし

目録終

海國兵談第一巻

仙臺　林子平述

水戦

海國の武備ハ海邊ニあり。海邊ノ兵法ハ水戦ニあり。水戦の要ハ大銃ニあり。是海國自然ノ兵制也。然ル故ニ此篇ヲ以テ開巻第一義ニ挙ル事深意あり也。尋常の兵書ト同日の義ニあらずと知べし

昇平久キ時ハ人心弛ム。人心弛ム時ハ乱ヲ忘

ル事。和漢古今の通病也。是を不忘して武備す
れバ蓋武ハ文ト相並ンて徳の名也。備ハ徳に
あらバ事（ワザ）之変に臨て事欠（カ）ざる様に物を備置
を云也

○当世の俗習にて異國船の入津ハ長崎に限（カギリ）
たる事にて別の浦江船を寄ル事ハ決して不
成事ト思ひ實に太平に鼓腹せる人ト云へし
既に古ハ薩摩の坊の津。筑前の博多。肥前の平
戸。摂州の兵庫。泉州の界。越前の敦賀（ツルガ）等江異國

船入津して物を献じ物を商ひなる事數多あり
し是自序にも言し如く海國なるゆへ何國の
浦江も心に任せて船を寄らるゝ事なれバ東
國ありとて曾て油断ハ致すまじき事也。是に
因て思へバ當世長崎の港口（ミナト）に石火矢臺を設
て備を張る如く日本國中東西南北を不
論悉く長崎の港の如くに備置度事ハ海國武備
の大主意なるへし。さて此事ハ為し難き趣意に
あらざれバ今より新制度を定て漸〻に備なせバ

十年にして　日本の惣海濱堂々たる厳備をなすべき事、得て可期、疑こと勿し此如ク成就する時ハ大海を以て池ト為し海岸を以て石壁ト為て　日本ト以て方五千里の大城を築キ立たるが如し豈愉快ならずや

○竊に憶へバ當時長崎に厳重に石火矢の備有て却て安房、相模の海港に其備なし此事甚不審（イブカレ）、細カに思へバ江戸の日本橋より唐、阿蘭陀迄境なしの水路也然るを此（コ）に不備して長崎にのミ備ルハ何ぞや小子が見を以てせバ安房、相模の両國に諸侯を置て入海（イリウミ）の瀬戸（セト）に厳重の備を設ケ度事也　日本の惣海岸に備ル事ハ先此港口（ミナト）を以て始ト為べし是海國武備の中の又肝要なる所也然ども忌諱（キイ／ハヾカリ）を不顧して有の儘（マヽ）に言フハ不敬也不言ハ亦不忠也此故に獨夫罪を不憚して以て書ス

○水戦を逞クするにハ第一に艦船（イクサブ子）の制作に工夫を盡スべし其次ハ水主楫（カン）取に軍船の操

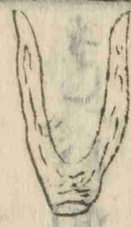
練を能く教へし其次に惣兵士に水練水馬船揖の取まはしを教べし是水戦の三肝要也猶委き事は下に出す所の文武兼備大學校の圖を見て知べし

○異國の武備志にも海寇を防禦する手段様々あれども是ハ唐山にて倭寇と名付て日本の海賊船を防ぐ仕形にして甚手軽き事どもなれど是を我國にて異船を防ぐ手本とは致難し　日本にて外寇を防ぐ術ハ是に反して事大イ也其大イなることは異國より　日本を兵呑すべき為に来れる事なれば其仕形も大仕懸なるを以て其大仕懸を砕くべき備なれば是又大仕懸にあらざれば叶ざる事と知べし其大仕懸の條ハ先に記す

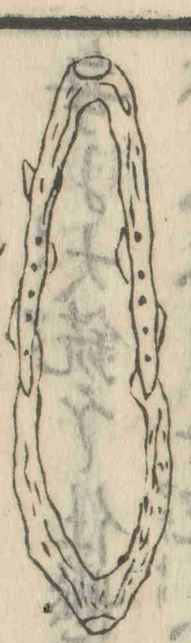
○海邊に備て異國の大船を砕くべき事を旨とするにハまづ異國船の制作及ビ堅實なることを能呑込べしそれを知て然して後其術を施スべし

○當時日本江來ル異國船ハ唐山、阿蘭陀（オランダ）、朝鮮（チヤウセン）、琉球（リウキウ）、暹羅（シヤム）等ニハ、北方ニ蝦夷（エゾ）船あれども未ダ本邦ニ來しためしをきかず、然どもい來ル事ありども取ニ足ざる小船ニハ、同ク北方ニ加模西葛杜加（カムシカツトカ）即カムサスカノ黒船あり是亦未ダ日本江不來ト云とも既ニ自序ニ言シ如ク加模西葛杜加のベンゴロウ、黒船ニ乗て日本を巡見しなるためしもあれども一圓ニ來ル事なしとも云難シ其船ハ和蘭船の類ニして小城の如ク堅実至極の船ト聞及ひて此船來ル程ならバ先常奥及ヒ上下總州等の港口江寄添も歟ト思ハる是海路の順道なれば故斯（カク）あるべく存ル之○唐山の船ハ長大なれども制作の法拙き故、其船堅実ならず、元（モト）より唐山人、船を呼て板（バン）ト云其心根只板（イタ）ニのみ心ニて板ニ乗り水を渡て用をなし迄の事トのみ心得なるゆへ其制作麁末（ソマツ）なるを浅なり只五彩の石灰（シツクイ）を以て塗て壮観を示スのみ是を碎

クにハ大銃（ツヽ）大弩（オヽユミ）を以て心易ク砕クへし暹羅、朝鮮、琉球、等の船ハ大聚、唐山船の制度に倣て其作り方甚麁畧にしく然も小なれハ唐山の船よりも又一段砕き易き所あり、阿蘭陀及ヒ欧羅巴諸國の船ハ其制作甚堅実廣大也勝レたる大銃にあらされハ砕ク事あたハす元より西洋人、船を呼て水城トいふ、唐山人の板ト云ト大地懸隔の違也既に水城トいふ上ハ其制作の堅実廣大思ひやるへし、まして自然（ジネン）の又木



此如クなる大材を連ねて船の骨組を作り其表（ヲモテ）、板を張へきし所ハ亦同ク又木の長大なるを首尾より組違へにはらねかさねて



此如ク積（ツミア）上ヶ鎗の柄の如クなる鉄釘（クキ）を密（ヒツシリ）に打貫き縦横（タテヨコ）に縫合せて仕立ル也其空隙の所ハ、蜜瀝青（チヤン）を込、又外面の水に浸ル所ハ悉ク鉛（ナマリ）を以て包て水をして一滴も船れ木江受さらしむる之船の長サ十六丈濶（ヒロ）き事四丈、深き事四丈なり、帆柱四本を建ツ

中央の大柱、高き事十九丈あり帆十と幟十二を懸く、船内ハ板敷を惣三階に張詰て所〻に天窓を設けて明を受く一階毎に上下の間九尺余し其廣平なる事馬場の如し第二段目の左右首尾に方三尺許の窓、三十余口を開て窓毎に大銃を仕懸置し其大銃三貫目の丸を入べし、殊に其舵工、甚妙にして一度船を繰れハ此大船、くるりと廻ルしたくで面楫に敵あきハ面かぢの大銃十二位を一より十二迄順に發スし發レ終レ時、相圖を以て舵工に命すれハ舵工、かぢを繰りて船を廻して忽チ取楫を面かぢの方江向れバ亦取かぢの大銃を敵に向て一より十二迄順に發スし其際に初メに發レたる面楫十二位に玉込して相圖を待し、玉込をするにハ窓外江指出たる大銃江船の上より移りて筒の巣口の所に馬乗に跨り居て込ルし火薬ハ紙の袋に入レて袋の儘にて込ルし既に取かぢの十二位を發レ終れハ

赤船も初メの如ク直ニして面楫を敵ニ向ケて発スなり其妙、言語道断ニして　日本唐山等の企及フ所ニあらず水戦ニ用て利あるものハ此船よりよきハなく敵に取て恐ルへきものハ此船ニ過たるなし斯の如クなるが故中〳〵尋常の大筒ニて砕カるゝものニあらず されハ近頃和蘭人の持渡しゝゲレイキスフツクといふ歐羅巴（エウロツパ）版（バン）の武備志を見るにも水戦の事ハ此船のみなりしが都て廣大無上ニして甚ダ巧ミなる戦艦（イクサブネ）多クある之其書ヲ見て大畧を知へし。

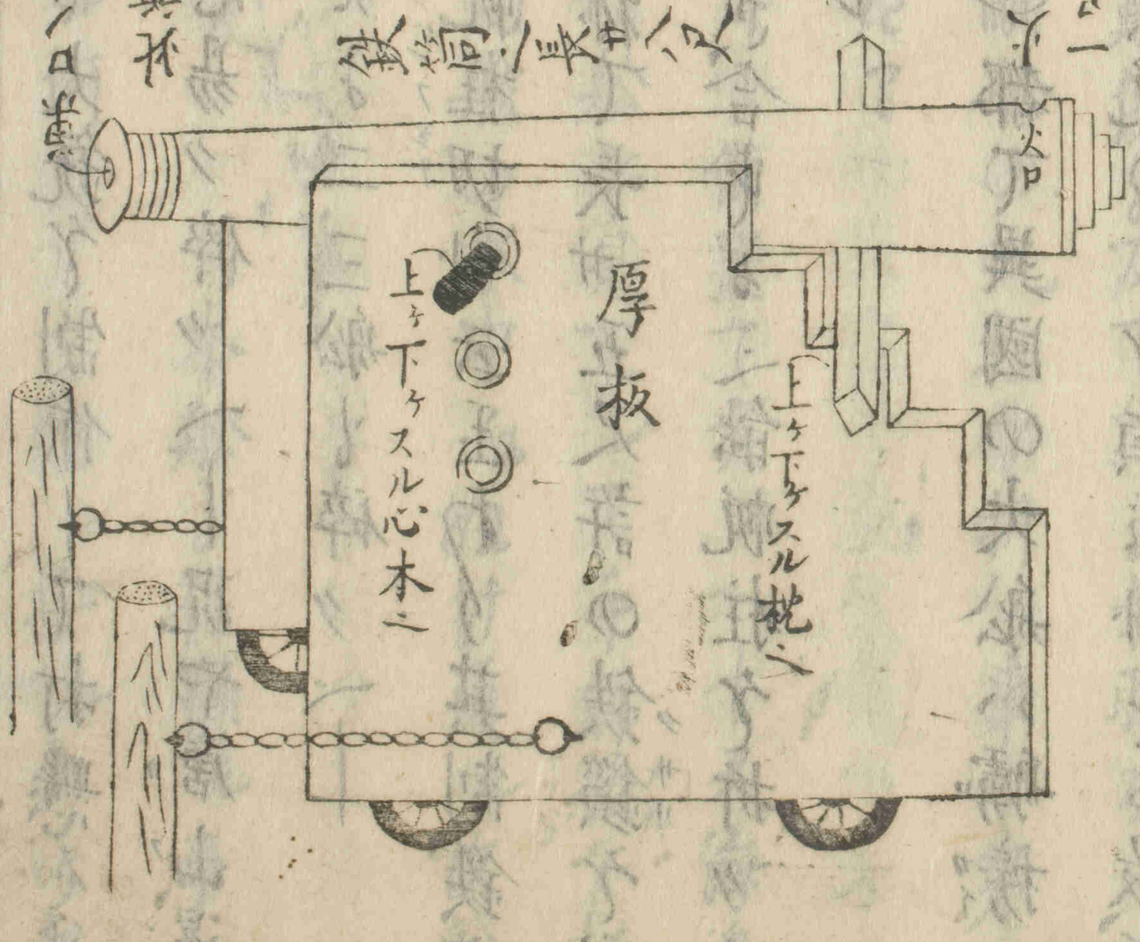
○右の如ク堅實至極の大船ある事なれとも、また是を砕クれ工夫を為へき事海國第一の戦法を考へし能心を用へし

○小子工夫せるニ和蘭（ヲランダ）船ニ仕懸置所の大銃（ツヽ）ハ皆前文ニ言ヒし堅実の大船を相互ニ砕（クダ）ク為の具なれハ此大銃の制度ニ傚ひて堅実の大船をして心易ク砕クへし安永中小子和蘭船ニ入

し其大銃の制度を量リ定て冊子ニ書ス其制度左の如し

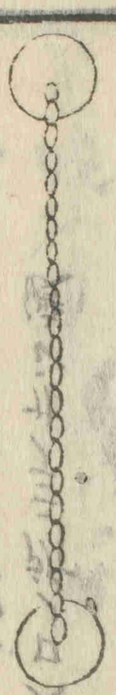
○筒の長サ八尺○同ク太サ筒先ニて指渡し一尺一寸薬持の所ハ次第ニ太ク成て其第一太キ所指渡し一尺四寸○筒の巣口の指渡し四寸（一貫目ノ鉛玉其指渡三寸九分三厘余ナレハ指渡四寸ノ玉ハ二貫七百目程ナリ）○大筒の圖左ニ出ス

阿蘭陀船ニ在
大銃之圖
唐山ニ拂郎機ト
云阿蘭陀ニカ
ノウンド云之


巣口ノサシ渡四寸
此所ニテノサシ渡一尺余
鉄筒ノ長サ八尺
火口ノ所ニテノサシ渡
一尺四寸
火穴
厚板
上ヶ下ヶスル枕之
上ヶ下ヶスル心木之

○右の制度ニ倣て大銃を制作して打懸とも彼ノ堅実の船をも心易ク砕クべし況や唐山(カラ)暹(シャ)羅(ム)等の麁船ハ一発ニ二三船も砕クべし

○和蘭の銃子(テツホウダマ)ニ帆柱切(ホバシラキリ)ト云玉あり其制、鉄丸ニ志て二ツ相連ね(て)長サ五尺許の鉄鎖(クサリ)を以て二銃子をつなき合せる之能帆柱を折ルト云り其制左れ如し



都て異國の大船ハ艣櫂(カイ)一向ニ施難クして只帆のミを頼ミトせる故、帆柱を折(クジカ)るれば甚難儀ニ及て終ニ乗取るトそ

○此故ニ相互ニ敵船の帆柱を折ル事を第一の働ト為ト聞及べし

○右れ大銃を海岸ニ備置て発スへし又海邊の山上ニ仕懸て敵船を見下して手前艦(フナバタ)を打へし打抜(ヌケ)ば其玉向艦の水中ニぬけ通ル故船江水入ル之

○右の如キ大銃を日本船ニ仕懸ル事ハ未ダ識らずれば如何とも言難し按ルニ此大

銃を　日本船に仕懸て玉入りを発さしむ必船開き損する事あるへし能試ミて後船に仕懸へし○又按に敵船の陸に近付くを打破ル為の備なれハ船に不ニ仕懸して海岸にのミ仕懸置ても用足ルへき也㊀一貫目内外の大筒を　日本船に仕懸て水戦に施スへき事ハ下に記せて、二三貫目の大筒を施ス事ハ未知㊀大銃を以て大船を碎くの働ハ此趣を主意にして損益せバ大筒さへあるを心易く打碎かるへき事也然ルに　日本風にて古ゟ大筒の制作甚不足也是海國の議に心附るゆへなり然ル時ハ海國第一の武備全からざるに似たり願くハ前文に言ル大銃を影ク制作して　日本の宝ト致度事也然とも當世を　公私ともに華美の雜費分に過て多きゆへ大筒の新制なとハ中〻思ひも寄らざる事なるへし然ト云とも明かに弁れハ華美ハ禁ズへし國土の武備ハ虧ゆへし此旨

を周ク天下の人々に呑込せて雑費の出ざる樣に制度を定メ自然ト質素に移ル名法を施シて上下の費をはぶき、國家を富せて、其後大小名の禄に應シ亦ハ國土貧富の場所に應シて大筒役ト云金銭を少シづゝ出させて上に言シ所の大銃を年々数を定メて制作シ日本國中ハ惣海濱にそなへ置キ、是を日本永代の武備ト志て天地ト共に不レ已の掟ど定メ度事也此大銃の備を惣海岸に設ケされバ　日本ハ武備全ク整ヘりとハ言難かるべし

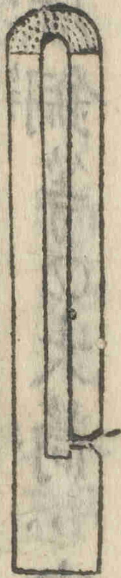
○竊に按ずるに　日本開闢より二千年来此大銃ハ備を海岸に不設して今に至て猶安全なり其上、外冦の為に嚴クたしなめられし事も今日に至ル迄曾て有らざる事なるに今新タに此海國ハ備を事々敷、言出ス事、且ハ思慮の過なるにも似、且ハ新説を好にも似、亦ハ狂言を発するにも似たれバ、然ト云ども天地間、

人間世の事にハ必変革ある事定りたる理也必萬々世も一定の今日ト思ことならは其上、五世界は國々早く開闢したるハ今年迄六千余年、遅きも三千年に足さるハなし然ルに各國、皆英雄豪傑あり各三千余年の智を積て天文、地理、海路、等を度量（ハカリ）して掌上（テノウヘ）に見ルか如し然ル故に相互に他の遠國を侵掠すへき工夫、五世界は英雄豪傑等互に是を旨とする事當世一統の人情となりて就中、歐羅巴（エイロツパ）の諸國、妙法を奉するは國人殊に此情多し然とも遠國を取ルにハ妄りに干戈を動さず只利害を説諭して其國人を懐ケて然して後に押領ス是ニ因て憶へし今　日本ハ歐羅巴ト路遠し其上、彼（カレ）か説諭（セツユ）ハ古来より取用ざる人情に、其干戈ハ路遠き故施ス事を得ざれバ我に於て歐羅巴ハ患ルに不足に、然ルに竊に聞ル事あり近年、唐山、韃靼の人等、歐羅巴（エイロツパ）人ト交親ト云り愈親を唐山、韃靼の英雄豪傑等、妙

法ヲ受ベし妙法ヲ受得テ侵掠（オカス）の心起ルべし、彼等侵掠の心ヲ起シテ日本江来ル程ならバ海路ハ近シ兵馬ハ多シ、此時ニ當テ備無ンバ如何ともする事なかるべし熟思ヘバ後世必唐山韃靼の地より日本ヲ侵掠せる企ヲ為ス者起ルべし怠ル事なかれ是閑闢より三千年の後今日ニ至テ小子始テ此言せる所あり竊ニ憶ヘバ此説（ハナシ）諸小予ガ度（モチマヘ）ニ過たり若クハ鹽竈大神の詑宣にもある歟

○鉄唐銅（カラカネ）等の大筒ハ定式ニして能人の知ル所之尤一たび制作して千年ヲ有ッものなれど此器ヲ重宝ト為ル事ハ論ニ不及之、然レども大器（タイキ）遅成（ヲソクナル）の理ニして積年の制作ニあらざれバ數（カス）ヲ得ル事不能之、若急速ニ數（アマタ）の大筒ヲ用ル事あらバ當坐の間ニ合ニ松の木筒ヲ用ベし指當ての急ヲバ弁スル之、然ト云ども是ヲ恃て真の大筒ヲ制作せる事ヲ怠ルこと勿かれ

○松の木筒ハ能丸を飛せて遠キに及ぶべきものあり然レども多ク用ルに不堪只五六発に限ルベし其制ハ生の松の木を丸ク削て二ツに引割其中心に玉の入ル程溝を抉ル也末をば抉止に為スベし抉り終て二ツを合せて竹の箍を首より尾まで透間なく懸ケて用ベし真の筒に減ざるものあり尤指火するべし抉り様左の如し。



是ヲ二ツ合セテ筒ニスル也

○火薬の制方ハ大槩九二一の法を用ユ硝九匁 灰二匁 硫黄一匁 右細末シ煎茶を以て煮合セ竹筒中に搗固メ竹を割て取出シ細カニ刻ミて用ル也又十二一の法モあり十（硝）三二一の法モある也

○丸ハ鉛を上とし次ハ鉄次ハ銑次ハ石次を煉丸也煉丸ハ砂石及ヒ銅鉄の滓を細にして漆或ハ膠を以て煉堅メて玉となし布を三偏衣セて用ル也又性好埴土にて苧ズサを切交へ

て丸となし布を三偏衣せて用ル也弱キ茱にて近キ船敷備をも打によし又イスブナ樫《カシ》等の堅ク重キ木をも玉に造り潮泥《シホ又ハトロ》中に埋貯《ウヅ・タクハヘ》入用の時ハ表皮《ウハカハ》を乾《カハカシ》し用べし。

右玉藥も變に臨て急速に拵へらるゝものにあらされど太平閑暇の日漸々に制作して貯置べし筒あれども玉茱無しては詮なき事也○火茱も久きを經て少し損傷せさるもの也小子安永中に元和年制の火茱を得て自ラ発して試しに却て新制の藥より好《ヨキ》様に覚ゆる也貯ルにハ銅器歟大瓶に入て埋ミ置べし

○大炮を以て大船を砕ク事ハ前條既に詳也其次ハ乱火、棒火矢等を以て焼討《ヤキウチ》を為べし別して黒船ハ蛮瀝青《チヤン》を塗故、殊に火移り易キ也扨焼討に様々あり左に記ス

○大筒ニ炮烙《ホウロク》火あり其制、銅を以テ径リ三四寸の空丸《カラタマ》ヲ拵（銅鑵ノ半片ヲ二ツ合テ丸トスル也）其中ニ硇五

十目　硫十二匁　灰五匁　松脂四匁　樟脳二匁　鼠糞二匁　右細末シ水糊ヲ灑て五寸廻りの竹筒中ニ搗固メ竹を割て取出シ錐を以テ長サ二寸許ニ切、紙袋ニ入、此物を四塊（ヨツ）銅鑵中ニ居、空隙の処ヘ火薬ト砒霜ヲ込ヘ（火薬ハ銅鑵ヲ割、袋薬ハ物ヲ焼砒霜ハ人ヲ眩ス）尤銅鑵ヘ道火縄ヲ指て外面ハ漆布にて張固ルなり此くもりの加減制法甚大事なりとくく大銃家の秘傳なりそれ術者をもちゆべし

空丸

道火縄一寸ばかりも頭（カシラ）三分出シ置余ハ横ニ臥（フセ）て漆布にて押（オサ）ヘ置べし

右の丸を二三十、一同ニ打込べし如何なる大船をも忽チ焼崩スべし

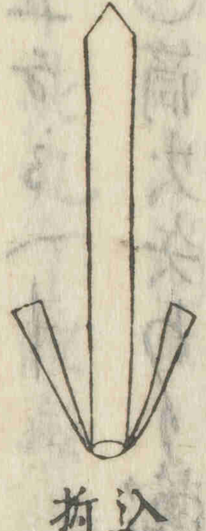
○乱火の法なり其制、鉄を以て小筒を數十挺拵、小筒ノ制ハ長サ二寸ニシテ三匁ノ玉ヲ入ベシ筒ノ末ニ火口有テ道火ヲ指揉ニスルナリ此筒ニ常の鉄炮ニ玉薬を込ル如ク火薬八分ほど入レて玉を込メ堅クつき固むる之尤小筒毎ニ道火縄を指之此小筒を十四五挺、筒

先を外(ソト)に向けて縦横に組合せ細き苧縄を以て結固(ユイカタ)めて丸くする其隙(ヒマ)々には粗末(アラキ)の火薬を所々に込て外面より道火を指込置へし扨漆布を以て能巻て高卑れ無き様に圓(マル)形をなさしめ小筒々々の先をして不閙して現はし置也し此丸を敵船江打込て兎角する間に大道火より胴薬江火移り胴薬より小筒々々の道火江火移れは十五挺の小筒鳴響て鉛玉飛出せは人をも破り物をも砕く之尤此丸をして初段

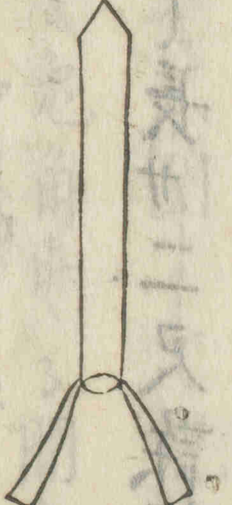
に言ふ炮燥火ト相交へて打込へし炮燥ハ物を焼此丸ハ人を破る故人近はく事能はして終に焼上ル之炮燥火十五あれは此玉も十五なるへし

○筒火矢あり薄金(ウスカネ)にて長サ二尺許廻りハ大槩八九寸に筒を張り其中に竹に込たる大薄(スヽキ)の花火を入子(イレコ)に為(シテ)（竹ニ込スシテ鉄筒ニ直ニ込レハ一槩ニ火移テ早ク燃盡ル故竹ニ込テ入子ニスルナリ）道火を指之尤鉄羽を附されて飛ざるものあり鉄羽の附様ハ蝶はつひ

〆して大筒江込ル時ハ其鉄羽ヲ筒先の方江折返して込ル之打出して筒ヲ離ルれハ其鉄羽後口の方江開イて風ヲ含ム故筒矢直ニ飛之鉄羽の附様左の如し



込ル時如此折返ス之



飛時ハ如此開ク之

右大薄の花火中江別ニ焼薬ヲ丸二して込され是物ヲ焼事不能也秘傳之ト聞及こも大畧ハ上の炮爍れ火薬ヲ胡桃子ノ大ニ丸レ筒ニ應して込ル之何レよりも大銃の秘傳家ヲ用べし

○棒火矢ハ何り尋常の六尺棒の太サニて長サ三尺許の樫木棒ニ鉄根ヲ植て棒ニ火薬ヲ塗て打懸レハ其棒目當の所江さゝり立て焼ル之其薬法ハ

焔硝 五十目	硫黄 十二匁	灰 五匁
松脂 四匁	樟脳 三匁	鼠糞 二匁

右日本方

又一方

硝（十匁）　硫（八両）　灰（三両三錢）

右兵衛の方

右何レも細末シ薄糊ニ和シて棒ニ塗之塗様ハ棒ニ溝を三道穿て此藥を溝ニ余て惣躰へも厚サ二分許懸ル程ニ塗附て外面をも紙ヲ以て張固ムへし尤鉄羽を附ル事上ノ筒矢ノ制の如シ此矢を二三十本高処より船中江打込へし或ハ船の横腹亦ハ艫の方舵の附（ツク）所江打込を善トス

○初ニ云シ炮燥火を三十挺細キ紐（ヒホ）を二尺許附て一人ニ一ツづゝ持せ小船二艘ニ乗ル（一艘ニ十五宛持乗ル）へ敵船の左右ニ忍ひ寄りひそかニ道火ニ火を移て一同ニ敵船江擲入へし尤砒霜藥を入るへし

○小棒火矢百挺を制して五ツニ分チ一船ニ二十挺づゝ乗せて敵船の左右ニ忍び寄り二十挺づゝ同シ、矢坪を志て五ヶ所ニ打懸て燒

立べし

右の外焼討の法又ハ曲打火矢繰玉（カラクリタマ）狼煙（ノロシ）、花火等の仕方大筒家に数々の傳授有て各秘する所あり都て火術にハ其術者を用べし

○弩弓を以て火矢を射懸ル術あり其法陸にても射出し亦船に仕懸ても射ルへし何レより射ルにも弦（ツル）を張り矢をはげひて後口薬に火を移して發スべし○船に仕懸て敵船に押寄て射ルにハ一弩に二人懸りなるべし一人ハ弦を張り一人ハ矢をはげひ火を指べし都て弩ハ矢をはげひ早きゆへ鉄炮火矢に勝ル事もあるなり尤楫を仕懸て漕にあるべし

○火船の術あり其法軽キ船に乾（カハキ）キなる柴萱（シバカヤ）を船一盃に高く積て縄を以て四方より引懸て崩レざる様に固メて柴にハ油を灑（ソヽ）ク之其積（ワヽ）畳（カサ子）なる柴の上ト舳先トに帆を懸べし扱筒（ツヽ）切（キリ）の焼（ヤキ）薬（炮爆火ノ処ニアリ）二三十斤を箱に込て両方に道火を附

ケ丈夫ニ足の附たる臺の上ニ載て船の中央（ナカ）ニ置キ縄ヲ以て船梁（ガリ）江結止メ桐油紙渋紙の類ヲ以て箱ヲ蓋（オホイ）置ヘし又別ニ火薬ト焼薬ト等分ニ相交ヘて二ケ所（焼薬ハ上ノ炮烙火ノ條下ニアリ）小箱ニ入て是ヲ三箇（ミツ）据ヘ道火縄ヲ指て柴の間ニ結付置之扱大風の時ハ別船ヲ以て風上ヨリ火船ヲ引廻シて敵間六十間許ニて小箱の道火江火ヲ移シて敵船の密ニ催合（モアイ）たる所ヲ目當ニ馳込スヘし（道火縄ハ大槩六十間ニ二寸ト積ル）之扱此船ハ敵船ヘ押付て彼是驗シ置ニ小箱の薬燃立て柴ニ火移きハ彼ノ大箱ヘも火移て燃出レも柴の火氣盛ニ成て忽チ敵船江火移ル之尤此箱薬も制法甚大事之

○西洋船ハ一艘ツヽ離レ居て催合（モアイ）ヲ成さる之此時の火船ハ別法あり但シ火船の制作ハ始ノ如シ此火船ハ小早（コバヤ）二艘ニ引せるなり小早の水主ハ一艘ニ十人たるヘし扱其火船の首尾（カシラシリ）ニ長サ一丈許の細キ鉄鎖（クサリ）ヲ首（カシラ）ニ二筋、尾

に二筋付ケ此四筋の鎖の先に長六七尺の棒
を附ケ棒の先に尖利（スルド）なる鉄の根を植ユ、捩附
鎖を火船の首の小早に二筋尾の小早に二筋
取棄せて火船ども二三艘連續して焼べき敵
船の楫（カヂ）の近所江押付べし其時十人の水主の
内二人ハ手廻（マハシ）早ク彼ノ鎖附キの大棒を敵船
の船板江力を極めて突立べし但シ楫江突立
ル事なられズ又二人ハ手廻早ク彼ノ焼（ヤキ）草を込
ある花火數本に火を移して小箱に近キ紫へ措
込べし此働すむ次第ニ小早を早く船を漕（コギ）除
クべし十火船より七八間隔れても火草震動して
も怪我（ケガ）ハ無ものト云リ扨首尾の花火より紫
に火移れても大小の箱草焼起リ大火に成て敵
船江火懸ルべし

○船中江棒火矢炮烙火の類を打込にハ隨分
真中江打込ム様にせべし亦外より仕懸て焼
にハ楫の所より焼懸ルべし是楫柄（ワカ）の穴有故
船中江火氣通リ易シ其上艫（トモ）の方にハ部屋く

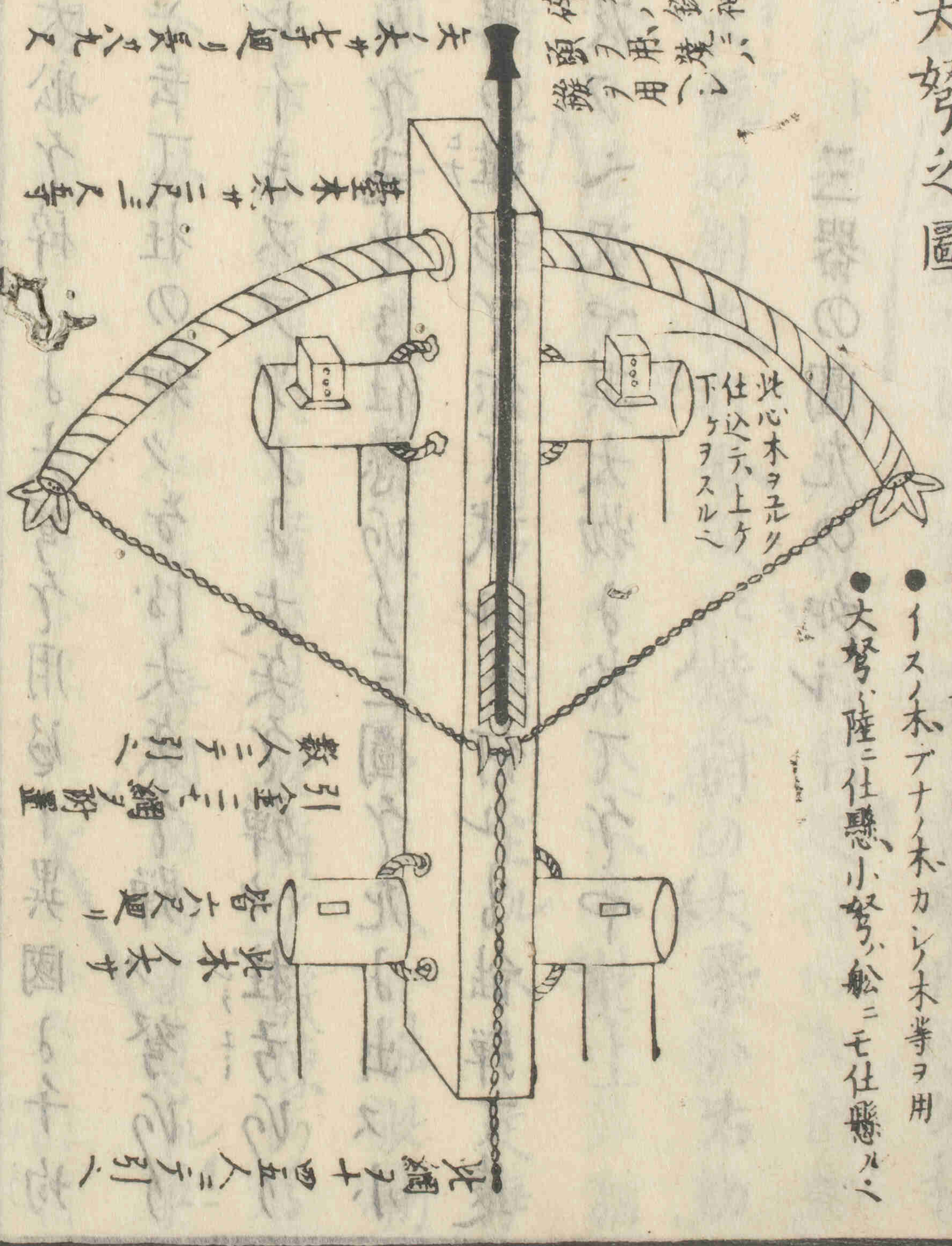
くもあり物置もあり窓も多き故船内（近）火移り易シト知へし是焼討の心得之

大銃（オホヅヽ）の制作打形及ヒ焼討の大槩ハ右の條々にてあらましを吞込へし此上ハ猶精理を極めて自ラ妙所に至ルへし是海國第一の武術なれバ上たる人ハ能此術を下に教（オシヘ）下たる者ハ能此術を鍛煉あるへし必ず上下ともに海國の為に怠ル事勿レ

○又大船を砕に大弩を用ゆ異國に千均（キン）の弩と云て柱の如くなる大矢を弾く弩あり亦ゲレイキスフツクに大矢を弾く柱弓（ハシラユミ）あり亦大石を飛せる仕懸あり三圖を左に出ス小子三器の雛（ヒナ）形を作て試しに何レも能弾て遠きに及ブ況や其大物におてをや

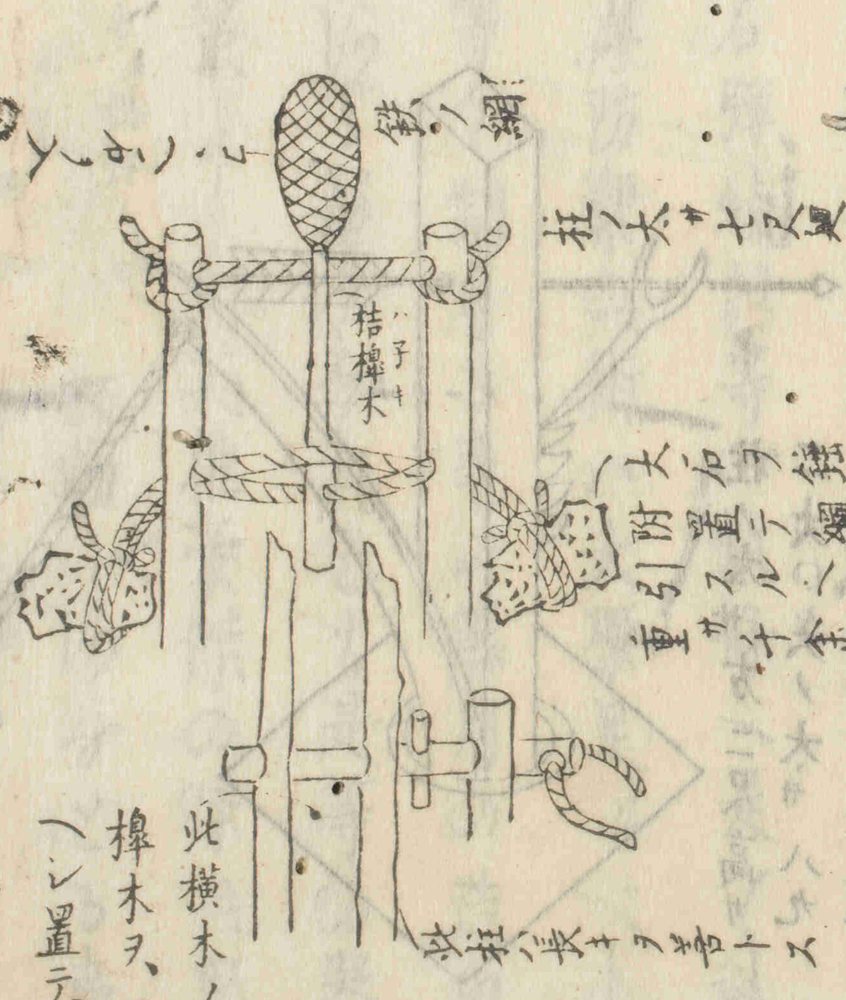
三器の圖左の如し

大弩之圖



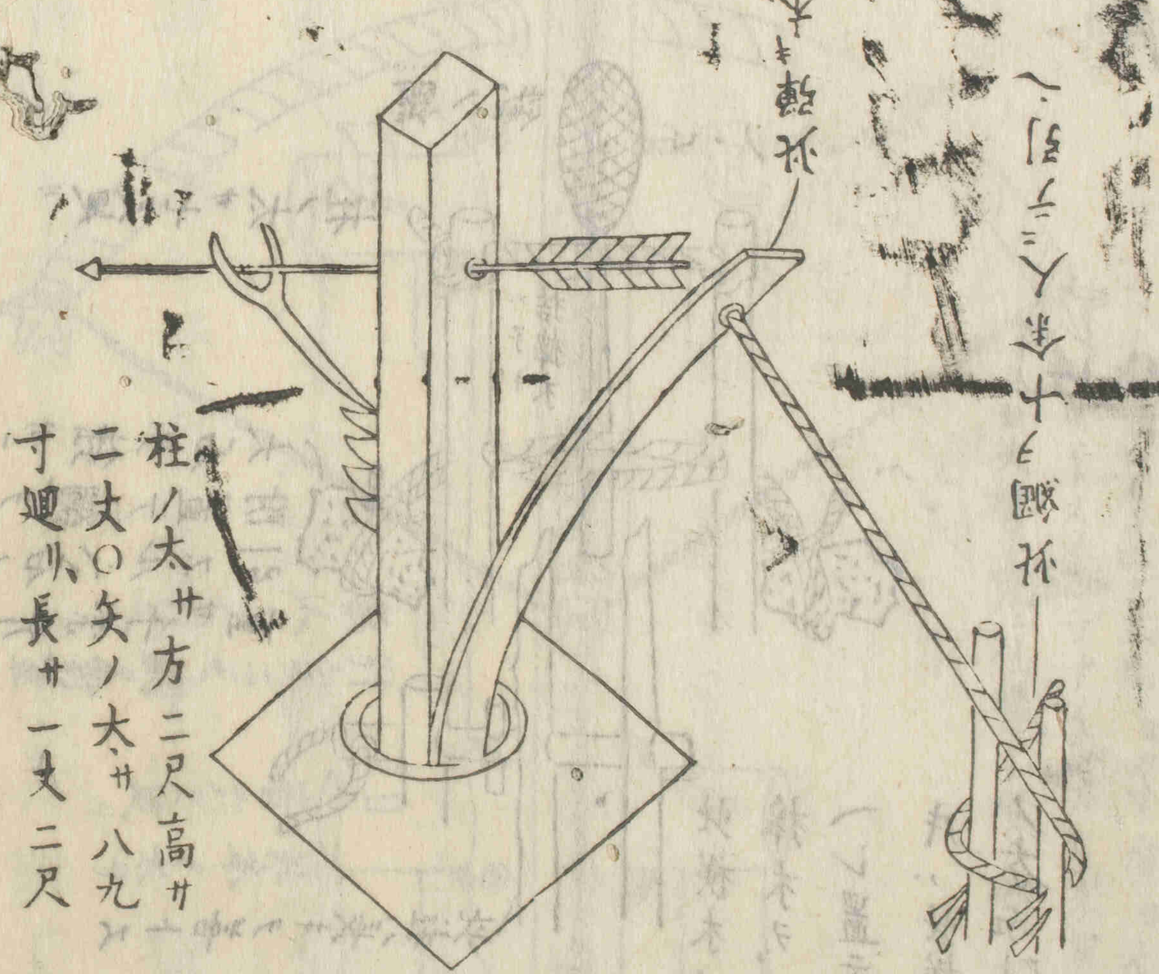
- ●弓ノ長二丈、厚サ四寸、廣サ七寸
- ●イスノ木、ブナノ木、カシノ木等ヲ用
- ●大弩ハ陸ニ仕懸、小弩ハ船ニモ仕懸ル

石彈之図



此横木ノ下江桔
槔木ヲ、子ヂカ
ヘシ置テ、ハ子ル
片ハ此横木ヲ脱
ノ方江引ヌク之

柱弓之図



柱ノ太サ方二尺高サ二丈○矢ノ太サ八九寸廻リ長サ一丈二尺

此柱弓ヲ車臺ニ仕付テ持アリクヿモアルヘ

○遠キニ及ヒ堅キヲ碎ク事ハ上ニ記セル大銃、大弩、柱弓、石弾、焼討等の數條ニ是ヲ能教諭鍛煉セハ海岸防禦の術ハ大槩足ルヘシ○大弩、石弾、柱弓等ヲ制セル事ハ無用の造功の様ニ思フ人もあるへきなれとも是等の器ハ火薬ヲ惜ム良策ニシテ英雄豪傑の深キ思慮ヨリ出タル事ニ必迂遠の長物トあなどる事なかれ制スヘシ

○飛道具ヲ以テ大船ヲ破ル術ハ是迄ニ記シ

終れり因て此次に年譜の水戦法を記す然ども諸流に傳授せる船軍ハ只小船同士の戦法のミにして異國の城の如キ大船江我が小船を以て仕懸ル傳ハ更に無之、今此書ハ我々小船を以て異國の大船を悩スべき術を旨ト志爲る書なる故まづ其術を初段に記ス也是を知て然して後小船同士の小挵合をも不知もへし

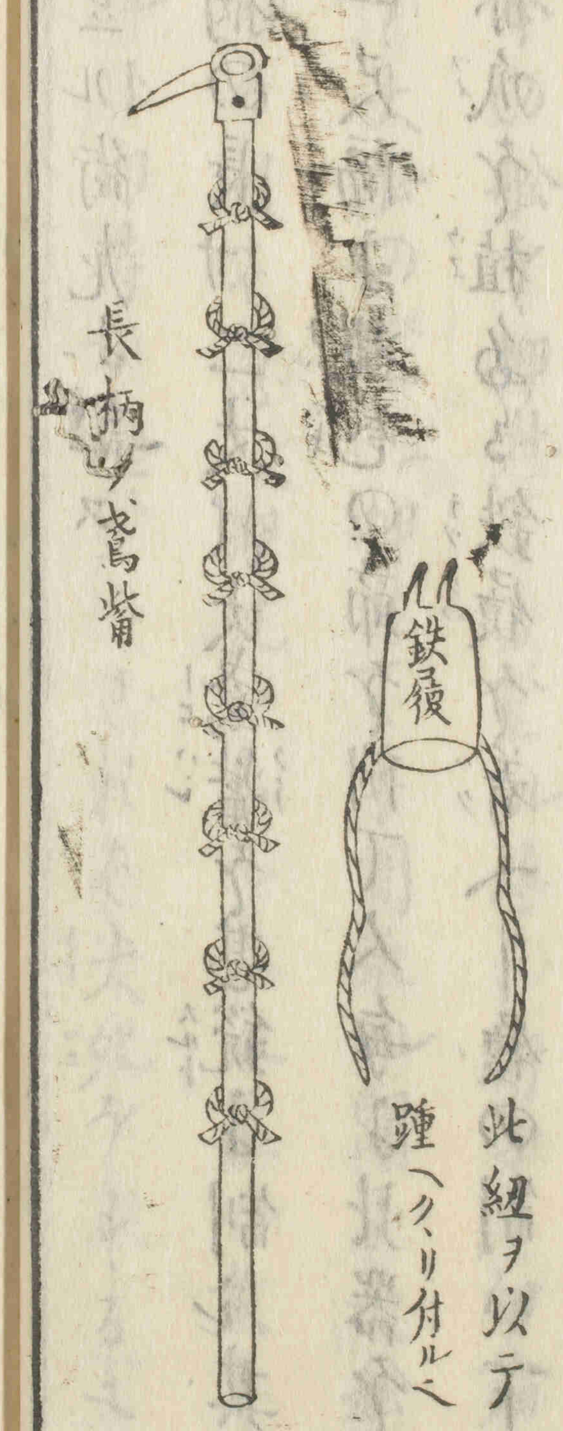
○小船にて異[illegible]江仕懸て働くにハまづ唐山和蘭等の大船[illegible]長サ高サ等を知て然して後其術を施スべし大槩、唐山の船ハ長サ二十余間、横五間余、深サ二丈余之其船の制甚反（ソリ）高之此船に四五百人も乗レハ船の中頃にて水面に浮び出ル所の高サ七尺余出ル之舳先ハ一丈四五尺浮び出、艫（トモ）ハ一丈許出ルなり○阿蘭陀船ハ唐山船より甚高大にして然も堅実之其長サ二十四五間、横六間許、深サ三丈五六尺四丈に及フ之其船の制反無（ソリナシ）志て平作リ之其

水上ニ浮び出ル所ノ高サ惣躰二丈許也日本の番船ヲ（番船ハ小船也長サ六七間也）阿蘭陀船江押付テ阿蘭陀船ノ横腹ニ仕附ケル所の階子（ハシコ）ヲ登ル也大槩二十階二十一階登ル也一階一尺ト積リテモ二丈也此如ク大船ナル由ヘ日本の船ヲ押付テモ登ル危キシ術ナシ勿論小船ヲ大船の際江押付テ手間取ル間ニ大船ヲ廻サルレバ忽チ押沈メラル也然ル故ニ押付ルト即時ニ飛登ラサレバ犬死（イヌシニ）ヲスル也其

飛登ル術左ニ記ス

○柄の長サ二丈ノ大鳶嘴（トビハシ）ヲ甚鋭（スルド）ニ制シ其柄ニ一尺隔ニ縄巻（ナハマキ）の節ヲ附テ人毎ニ此器ヲ持チ亦爪（ツメ）ヲ植（ウヱ）タル鉄履（テツクツ）ヲ着（ハク）ヘシ履の制ハ下ニ図ス扨阿蘭陀船江押附ケバ即時ニ此鳶嘴ヲ船の上段ニモ深ミ能打込ミ彼ノ爪履ヲ船板江踏（フミ）懸カラシハタグテ登ルベシ登リ終ラバ手廻シ早ク船中ニ飛込テ切立ベシ然シカラハ此働ハ五人ヤ十人の小人数ニテ登レバ皆難

落されて死スべし法ハ戦士二十人乗の小船を二十艘乗揃へて大船の左右江十艘ほど一同に押付ケ一同に打懸ケ一同にたぐり登り一同に飛入べし甚大事の働之能〻教諭繰練あるべし



此紐ヲ以テ踵ヘクヽリ付ル之

小子此両器を用て異國船江たぐて登りし事ハ未タ試ミされども尋常の直立（スクダチ）の所江登て試しに思ひの外能登らるゝものゝ三四度の稽古にて身も軽ク覚（オボヘ）気位も滞りなく覚ゆる之疑フ事なかれ

○或説に右のたぐて登りをするに左右より一同に懸れバ船中も左右に備て防ク故登りかたし、たとへば小船二十艘あらバ十艘左方より押よせて短兵急に攻登ル躰を現ハし後

し船中其左方を防クべきか為ニ人数皆〻左方ニ片よるへし其時殘りの十艘手廻早ク右方江押付てあくまて登るへし登ルト等ク抜連て船中を難廻ルべし其騒動中ニ左方の人数も登りて切立ルへし

按ニ左右より懸ルとも一方より懸ルとも時の宜きニ随フべし何レニも手廻しさへ早けれハ勝を取べしと思ハる働を悠ニなる事なかれ

○中船ニ御堅メの荷を積て其上ニ高サ二丈許の階子（ハシゴ）五挺を建て左右江四五尺ほどひらかく様ニ仕附置べし此船ニ戦士五十人を乗せて十艘を一組として五艘ほど敵船の左右江押付て彼ノ階子より傳（ツタハ）り登ルへし尤何レも鳶嘴を持て船端江打かけ〳〵攻入べし鳶嘴を用ル事ハ階子を押倒されぬ為ニ船中ニ飛入ては無二無三ニ切立へし

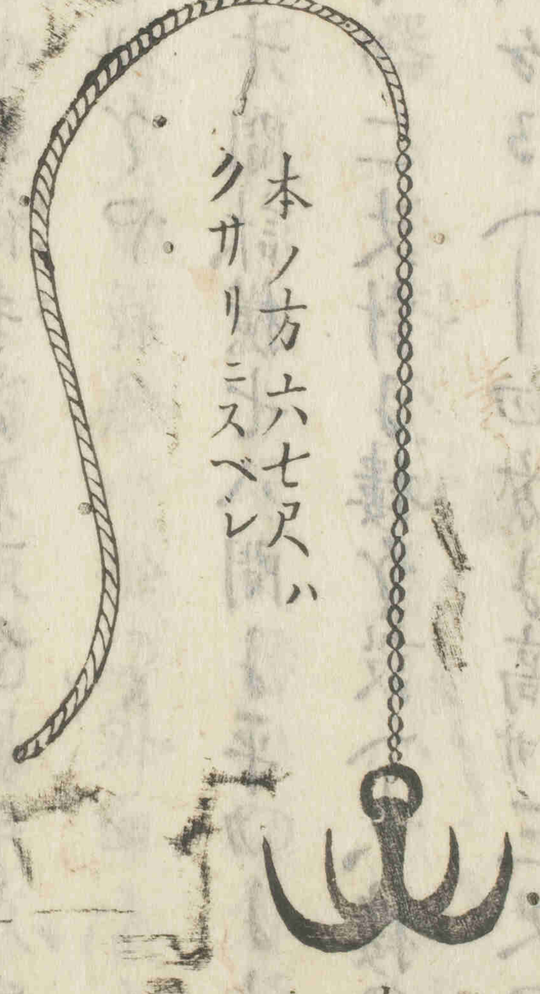
○小船十四五艘ニ戦士十五人ほど乗せて何

レし初メに云レ鉄履を着（ハカ）せ其上に柄の短キ鳶嘴を両手に持せて大船へ押寄ルト即時に両手の鳶嘴を打懸〳〵鉄履の爪を踏懸〳〵挙（ヨヂ）登ルへし、のかゞりおハ〳〵ぞ抜はれて切立べし

右の器にて挙（ヨヂ）登ル事も小子直（スク）立（タチ）の所江登りて試ミたり是又思ひの外登り易キ事ハ殊に西洋船ハ船の外面に大綱大錠、水揚（アゲ）の器など有て取附易キ故、無事の時挙登レども徒（カラ）手にして登ラるゝハ況ヤ其器を用ルをや

○長サ五十間計横七八間に平カに大なる船を制し高サ二丈計に楼を設へし、楼の廣サ三間に六間なるへし、四方に高サ三尺の囲を附ルへし、此楼を二ツ建て楼の内に階子を仕附ケ上の坐江登ル様に構（カマ）へ戦士三百人を乗せ二百挺の櫂（カイ）を以て船を進ませ敵船江押付ケて弓鉄炮鎗長刀等の働を為サしめ、近付ケ打鈎、鳶

鬣等ヲ以テ打懸テ敵船江乗移リ大働シテ敵船ヲ乗取ヘシ是又和蘭流之但シ此船ハ脚遅キ故大銃ヲ以テ設ケある大船ヘハ酙酌あるヘシ尋常の大船ヲ以テ乗取ヘシ能臨機応変せよ



本ノ方六七尺ハクサリニスベシ

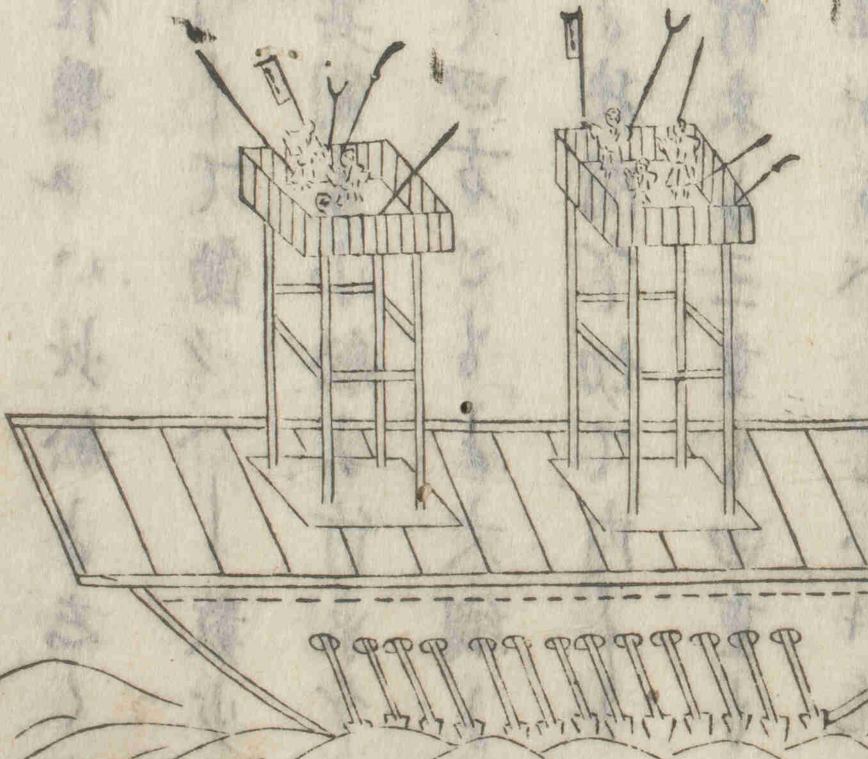
打鈎

○此船ニ乗ル戦士三百人ニ

○二百挺ノ榜（カイ）ヲ用ベシ榜ヲカクノ人ハ板子ノ下ニ在テ働ク只舵（カヂ）候梶取バカリ板子ノ上ニ在テ取梶面梶ノ下知合図等ヲ致スベシ

船ノ長サ五十間

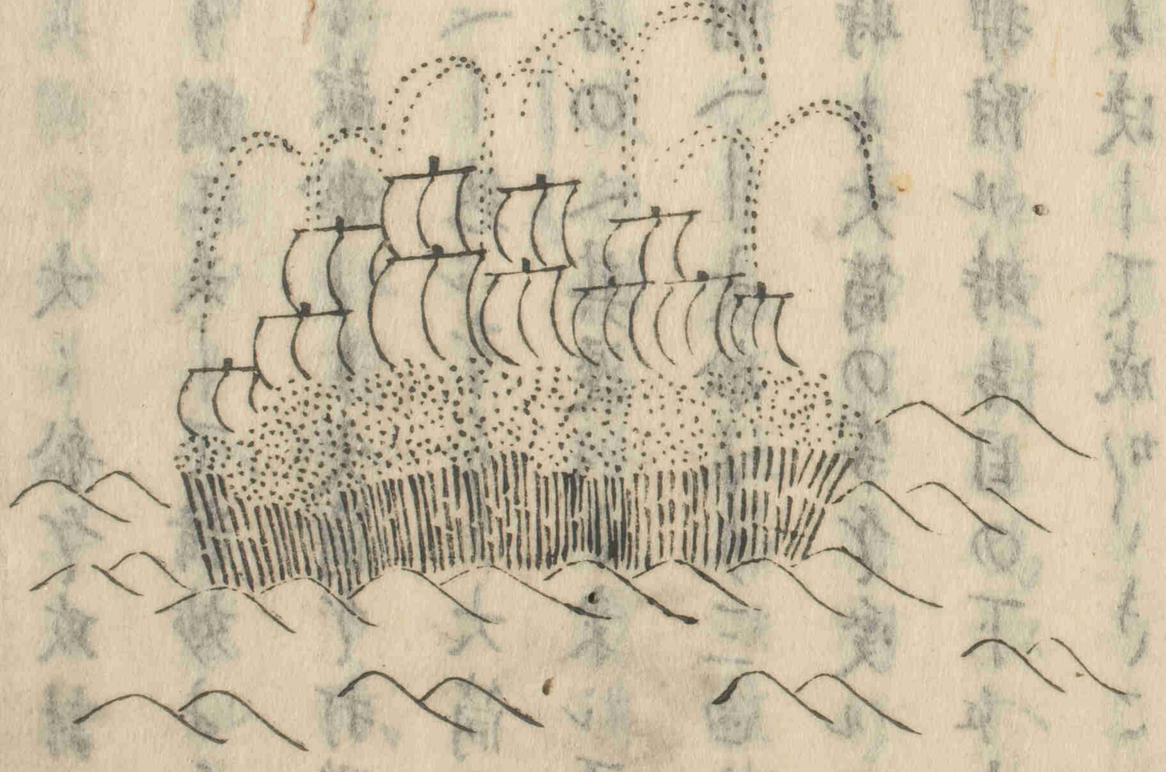
楼ノ高サ二丈



○竹束船あり鉄炮を多く仕懸たる也、又ハ焼討を専トせる敵船江仕懸ルハ此船にしくはかし尤二十艘を一組トして働くへし数少キ船にて働く事勿レ扱其制は小船に竹束を幾重（エ）もしげく、もかけて付て四方ともに大綱にて内に結附、あいさくに狭間を切て内より四方の能見ゆる様にし竹束は三重も四重も仕附て垂（タレ）て水にひたる程なるべし尤小キ帆を数々揚て鉄炮にて二本三本打切レても、かまはず目あての敵船江走り付様にすへし尤艪（ロ）櫂（カイ）も自由にはたらくべし扱鳶嘴熊手等の届く段に成て内の大綱を切くらへども何レにても一方の竹束ぐまらけト落て吾が船ト敵船ト肌合せになる時、トビ、ク下デ、梯子、等自由に取まそして敵船江もかけて付種々の働キあるべし船は二重底にして水の入らぬ様にし底を重くして覆（クツカヘル）没の憂なき様にすへし勿論板子の下をいくへにもしきまて水のかよはぬ様

に塗堅ム爲し是ハ銃丸（テツホウ）にて打ぬかれても志きても外の（江）水のこをらぬ爲之尤此志きてを此船に限らバ軍船ハ悉ク右の如ク志きるへし亦船毎に水をちぢきを多ク用意し常に水をしちき上て竹束れぬきひたる様にして焼討の難を辟（サク）へし竹束も早クもへし風まけせぬ爲之都て此船も火船同様にて大風の時風上より仕懸ルがよき之其制作并に働等の事ハ能操練して其妙處に至ルへし

竹束船之圖



○船ノ見ヘヌ程竹束ヲ厚ク附ル之

○図ノ如ク不断水ヲ揚クヘシ

○帆ハ一船ニ十五六懸ベシ

右の數條ハ異國の大ゝ船を攻討へき趣向は大畧あり猶工夫して精妙に至ルへし但シ何レも敵船より大筒を打懸ケらるゝ事あるべし然レとも大筒の態は手廻シ遅きもの之其遅きに乘シて手間疾（トク）大船江押附へし大船より三四十間以上離レ居ル時は大筒の害を受ル之早ク敵船の際江押附ル時は目の下江大筒を打懸ルことは決して成かたきことゝ知べし

○右數條は働は多しは夜討に為スへし時宜に因て晝（ヒル）は為（サ）るゝ事あれども目に見ゆる時は敵船にて防キの手當て仕易キ故寄手は方に損あり此故に夜の働にするを専とすべし

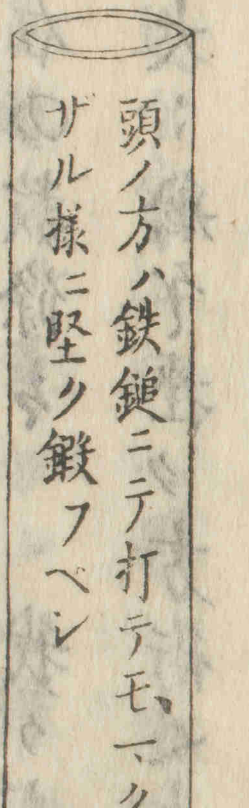
○夜討して首尾好大船江飛入ある時暗（ヤミ）にては不知案内の船中働難かるへし然ル故に戦士敵船江飛移らせ我カ船より早ク松明を燃

して敵船の中を照ス様に為べし其法、たとへば戦士二十人乗りの船なりとも水主に十人あるべし敵船江押付ケて戦士挙登れは時十人の水主の内五人に兼てハ役定メにて長サ二丈余ハ松明を一船に十本ほど用意仕置て戦士敵船江ゐぐて附クを見ば五人ハ艣（ロ）櫂（カイ）を捨て彼の長松明江火を移し戦士敵船江飛入ト見ば早ク長松明を敵船の船端江指上ケて船中を照スべし一艘ハ小船より五本ほど指上ケて十船にて五十本燃ス時に敵船の中に随分明白なるべし然レとも是ハ一時ハ明（アカリ）をなすそのゝかり後ゝハ段ゝ人数を繰上ケて松明の役に船中にて松明を燃して戦士を助クへし何レも取懸ル初メに能ゝ役定メを約して呑込セ間ちかひのなき様にして働キ懸ルへし

○小船数艘に水練の達者数十人を乗セて敵船江忍ひ寄水を潜（クヾツ）て敵船ハ船底（ソコ）江穴を穿て

水ヲ入こむる術あるべし其法水練毎に桶ク瓢を頭に付両手ヲ働カせても頭の沈ミざる様に為べし扨筒鑿ト鉄槌とを持て敵船江寄附て手の及ぶだけ水底江彼ノ筒鑿を打込べし既に船板を貫て船中江水の入ル時は筒鑿の頭江手を当て伺へば水の入ルは指を吸入ル様にして能知ルもの也其時鉄槌計持て早ク逃去べし扨一船に水練二十人乗て十艘を設クべし五艘は左右より忍び寄て水練毎に悉ク穴を穿チ終せれば二百穴を穿ツに如何なる大船なりとも忽チ沈ムべし西洋の海賊此術を施ス者ありと聞及べり

但し西洋の大船は堅実の丸木を以て船を造り立ル故鑿の力及難カるべし只唐山、暹羅等の板を以て造レル船に施スべし鑿の形は左の如し



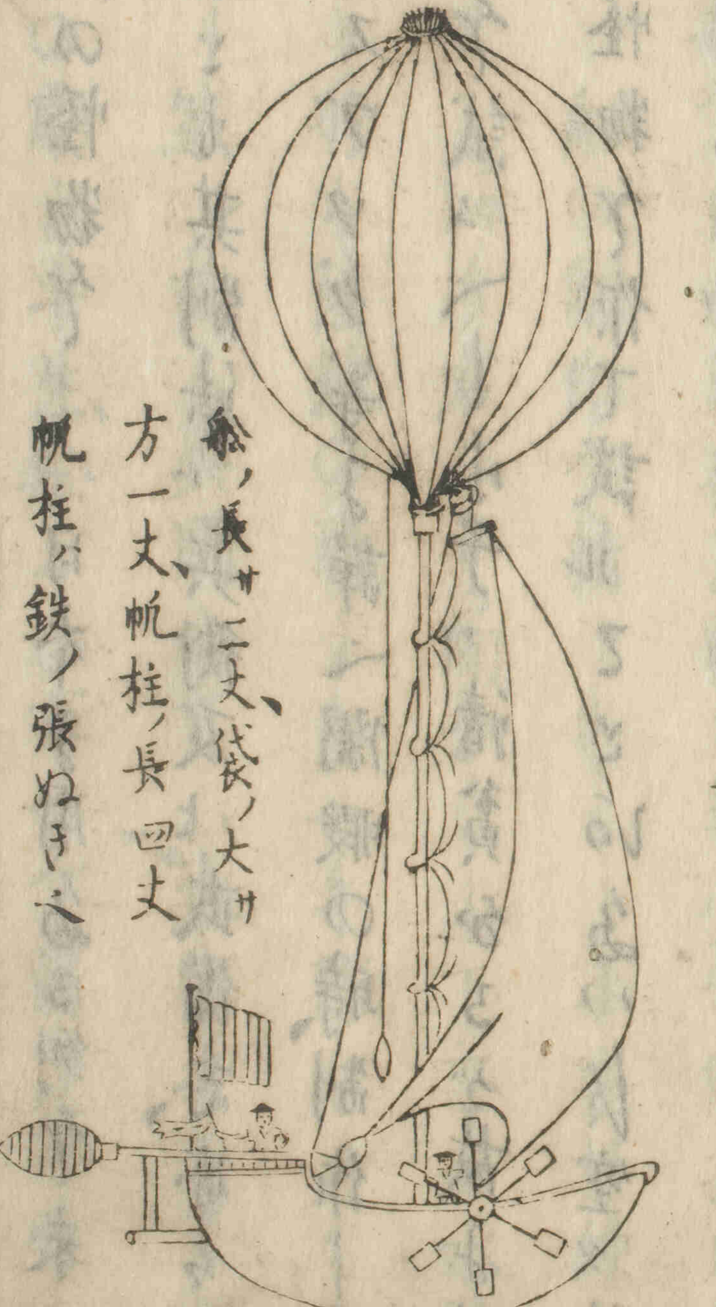
筒鑿

右の數條ゟ我ヵ小船を以て異國は大ミ船を挫ク方術之上下一致して能教諭鍛煉ありバ遠ク歐羅巴江押渡ルとも後レをバ取まじき之況や遠ク此國江来レル異船をや然レども上、教方なく下、鍛煉なくんバ亦復、空談ト成べし、ゆるかせにする事勿るべし

○異國人ト戦フに第一は心得ある段を言レ如ク異國人ハ血戦に鈍キ故種々の奇術、奇巧を設て互に人気を奪フ事を勤トス其國人同士ハ覚悟もある事なれども其事を不知レ日本人ハ彼ノ奇術に逢バ恐入て実に膽を奪（ウバ）レ臆病を生して　日本人は持前なる血戦も弱クなる之小西大友の輩是之小子按に其奇術奇法ハ何レも繰（カラクリ）にして武は真用なき、物なれバ其奇術奇法を少も不恐して只一向（ヒタスラ）に切込を第一の心懸トすべし必ゝ奇術は仕懸物に臆スル事勿レ心得の為に其奇術を下

に記ス○火矢（処ゝに火燃ル）○神煙（処ゝに煙立）○毒霧（晴天に霧起ル）○火禽（数多の火の玉中天を飛）○火獣（数多の火の玉、地を走ル）○八面炮（八方江飛出ル鉄炮）○水底龍王（水の底にて雷の如ク鳴）○地雷（地中にて雷の如ク鳴て火火ゝ地上に燃出て人を焼之）○理圍古突悉吉不（中天を鳥の飛ブが如ク自由自在に乗廻ス船なり○理圍古突ハ気の蛮語、悉吉不ハ船の蛮語、気で乗ル船ト云事なり）右の外猶幾許もあれど皆実用なき物之中にも此船ハ別て恐ロ敷物の様なれども是亦ありしもなき物之若我が軍上を乗バ鉄炮を以て帆柱の上に在、風袋を打抜ば気漏して船落ル之生捕て弄ブへし然レ共怪物を見馴さる人ハ見慄して臆病を生スる之此故に異國人ト戦ルに是等の物に恐なト云事を戦の度毎に能ゝ諸軍に示スへし

理圍古突悉吉不之図


船ノ長サ二丈、袋ノ大サ
方一丈、帆柱ノ長四丈
帆柱ハ鉄ノ張ぬき之

右數多の怪物を日本ニ用ゐる例を未タ不聞、然とも其制法ハ兵衛及ヒ武備志、亦ハゲレイキスブック等ニ詳之閑暇の時、制作して其実否を試ムべし小子ハ清貧なるが故ニ此數多の怪物を作て試ルことあたはズ空ク後賢を待而已

此下、世間並の水戦法を記スの、嚮ニ所謂、小船同士の小挊合之

○水上の戦ハ陸地の覚悟ニてハ相違ある事之先大槩を言フ時ハ第一、船の進退自由ならずして一身の駈引も思フ儘ニ仕難キものなれバ第一ニ船を自由自在ニ為ルニあらざれバ不叶事之船を自由自在ニなる事ハ揖候、揖取等を撰ブト船の制作を精クなるト平生操練を能なることニあり右の了簡なくして急ニ水戦ニ取懸ル時ハ陸地の戦より一手際悪キものへト言リ然ル故ニ異國ニてハ水塞ト云て海邊肝要の處ニ平生、船手の軍士を備置て時く

津〻浦〻の船を集メて水戦の趣を操練せる事ある也今も朝鮮にも處〻に水営を置て其教令能整しりと聞及ぬ是等の事ハ羨へき事なる哉

○船役といふハ知行高に應して軍船を出サせる事也此積りハ家〻國〻の定メあり亦山國水國の差別もある事なれハ一定の事ハ言難し大畧を心得居て國土の宜キに隨フへし亦國に因て商買の船も軍用の時ハ大小船ともに悉ク國主江指上ル掟もあるなり何レに宜キに隨て定むへし

○船軍ハ大小船を組合スル事也大ハ正兵ト成て敵に當ルを主とし小ハ大船を助けて奇の働を為へし

○大船小船の利を辨せる時ハ大船ハ乗廻して自余の小船を乗沈ムルに宜し又道具を備て敵をなやますに宜し石を落して小船を苦しむるに宜し大筒を仕懸ルに宜し都て大

洋江押出ル程大船に利多シト知へし
○小船の利ハ軽ク数往来するに宜シ大船を
助て奇の働をするに宜シ急の援兵に宜シ二
三十目の大筒を仕懸ケて大船の横腹、水に入
ル所を狙ひ討にするに宜シ物見に宜シ火
船に宜シ是皆小船の持前也
○異國にハ楼船ト云て船の上に二三重の楼を
構て戦士を影ク兼て水戦を為ス事あり此船
ハ水戦に利多シト云り　日本に今迄楼船
の制ある事を不聞ト云ども志ある将帥制作
あり度事也たとひ真似楼船にあらずとも楼
船の心持にて制作ある時ハ水戦に利多き事
あるへし
○楼船ハ云に不及、大小船ともに楯を用て矢
炮を防クへし別して大将の坐ト揖候、揖取の
居所ハたしかに囲フへし但シ船楯（タテ）ハかけは
ずし自由なる様にすへし
○米穀塩噌の類、船に應して積（ツム）へし大船に米

薪の類を積ニハ一重米、一重薪ト段々ニ積入ルべし

○櫓（ロ）のもや緒（オ）ハ鎖ニ為べし敵ニ切られぬ為也

○楫（カナミ）候ハ切者を撰ブべし扱始め、ひらきの相図ハ言語ニて演（ノブ）ル事なられ鳴物（ナリ）の相図を定むべし、為ニ之を鈴（スヽ）ト鳴子トを仕懸置て面楫ハ鈴、取かぢハなる子、両方一同ニ鳴させて真（マ）艫（トモ）ト云様ニ定むべし但相図の鳴物ハ心次第なるべし

○櫓擢（ロカイ）ハ定りの外ニ余計を用意すべし損したる時の用心なり

○船ニ應せさる大旗ハ立ル事なられ重くして船不自由ニ成、其上大風ニも負（マケ）ル、只目印（シルシ）迄ニ一本を立べし但し将机船ト樓船トハ軍威を示ス為なれバ旌旗の数を立ルものゝ但大将別船ニ在ル事ハ心次第なるべし

○取合ニ成てハ艫（トモ）櫓（ロ）三四五挺のゝ立て余ハ

悉ク揚ル之

○舳先ト艫ニ心丈夫なる者ニ打鈎を持セ置て敵船江打懸させべし近ク引寄セなる時ニ熊手鎖等を打懸て乗移ルべし打鈎の図ハ初ニ出

○都て船ハ片時ニありても乗かくらぬ様ニ御座とゝなるべし其仕形試ミて善を用べし

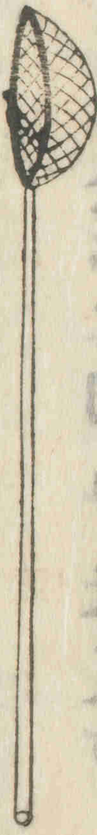
○水主の者どもニも平日ゟ鉄炮を教置（オキ）取合ニ成て艪搒を揚なる時ハ水主ニも迯道具ニ働を為サしむべし

○小船ニ帆を上て大風ニ走ル時ハ乗返ス事なるハ艫ニ席（ムシロ）を下（サゲ）て水ニ引ク時ハ乗返かたくと云り

○船ニハ天然ト脚の遲速なるもの之尤制ニ因て遲速もなる之何レニも遲ニハ艪搒を増速ニは減する之

○鉄炮を船毎ニ用意仕置て松明を燃シ亦

○焙烙火を敵船江擲(ナゲ)入へし亦敵より此方の船江擲入たる時ハ此器にて、すくひ返すへし、たもの網は針金にて拵ル之其形左の如し



鉄たもの図

○柁(カヂ)の折レたる時ハ艣(ロ)櫂を二三挺、艫(トモ)の左右に立て結付ル時ハ船覆(クツカヘラ)さる之此外舟楫の事に習たる船方の者に尋問て猶精妙に至ルへし

○湊川口等江入ルにハ敵に臨ムか如ク思フへし先ツ物見を遣レて陸地迄も探て後に船入すへし必卒尓にする事なかれ

○出船帰船ともに必船魂(タマ)を祭るへし其身不信仰なりとも必祭るへし是人心を安堵せしむる権謀之

○剝(ソギ)木、片(ヘギ)板、まきはだ、鉄搥(カナヅチ)、煉石灰(レツクイ)等毎船(マイセン)多ク用意あるへし船を鉄炮にて打抜(ヌカ)れたる時早ク塞クべき為の具之亦そき木に綿(ワタ)或まきはた

ワタ類ヲ纒付置テ大筒ニテ船ヲ打抜レタル時早ク此物ヲ押込ミ其上江板ヲ打附石灰ニテ塗塞クヘシ皆一時の急難ヲ救フベシ兼テ水主の中ニテ此役定メヲ致シ置ヘシ

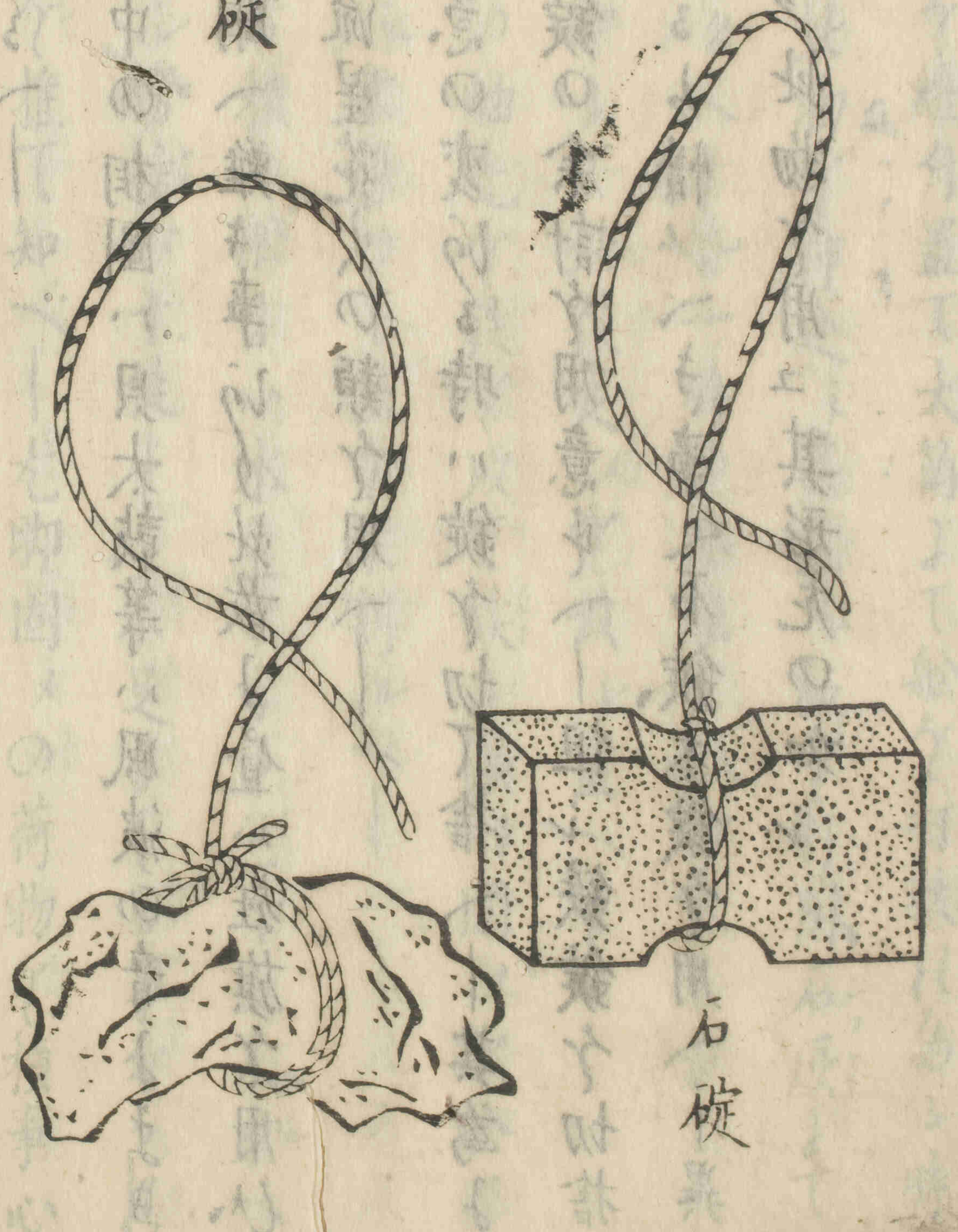
○船の舳先ヲ鉄ヲ以テ鈬ニ張リ固メ敵船ニ横腹江乗懸ケテ板ヲ乗割ルヘシ

○百石積の船ニハ水主どもニ三十五人乗ヘシ但シ艕搒ハ十挺ヨリ不足ニなる事なかれ余是ヲ推テ知ヘシ尤脚固メの荷物ヲ積事心得あるべし

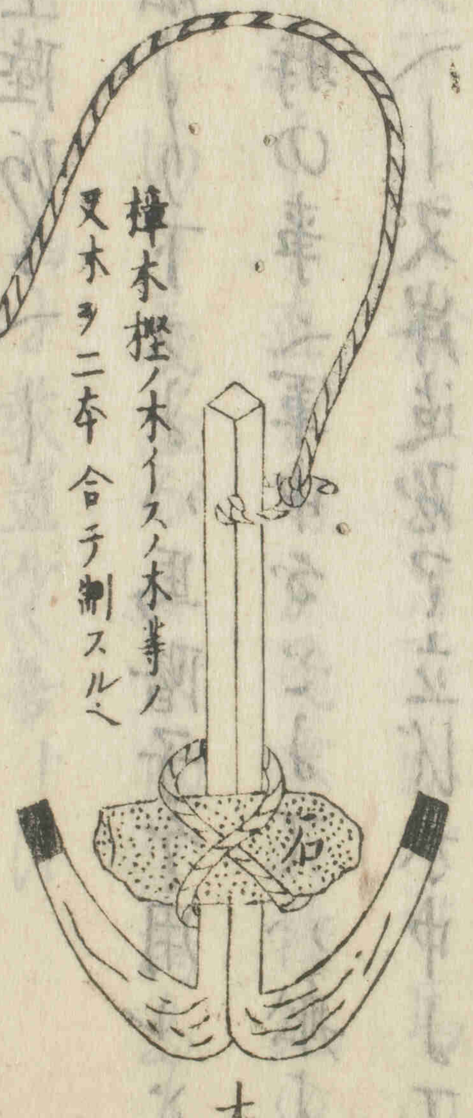
○船中の相圖ハ貝太鼓等ハ風波の音ニまぎれて聞ヘ難ギ事あり此故ニ昼ハ旌旗ヲ用ヒ夜ハ流星花火の類ヲ用ベシ

○火急の変ある時ハ錠ヲ切テ捨ヘシ其為ニ毎船錠の余計ヲ用意スヘシ但シ鉄錠ヲ切捨ニなるを惜ムべき事ニ石錠木錠ヲ用ヘシ異國多ク此物ヲ用ユ其形左の如シ

石碇



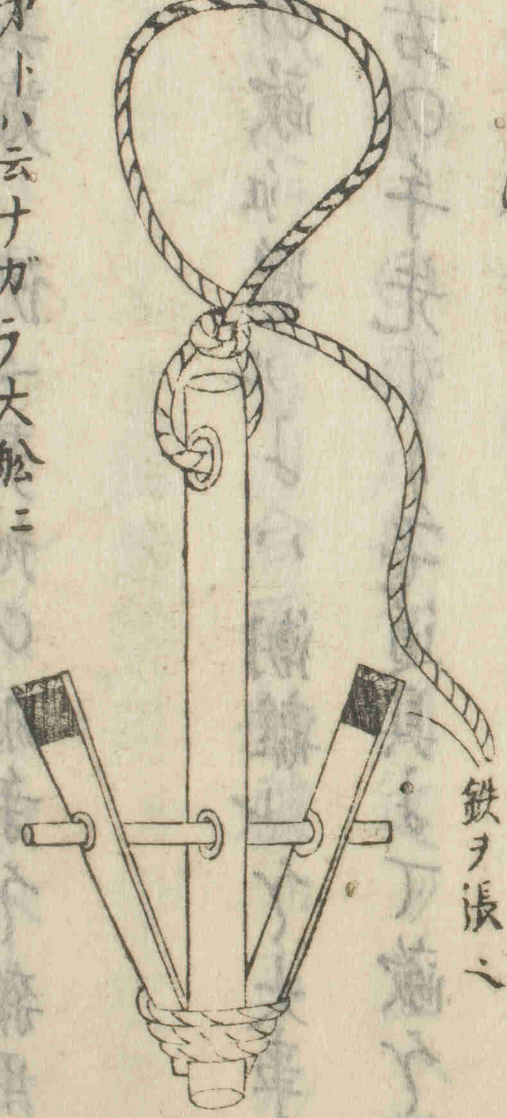
石碇



樟木樫ノ木イスノ木等ノ叉木ヲ二本合テ制スル之

木碇

木碇



鉄ヲ張之

大小心次第トハ云ナガラ大船ニ用ルハ長サ三間余之平生ハ潮入ノ泥中ニ埋メ置之唐山人多ク此錠ヲ用

○國の地勢に因て風の出ル方角あるものゝ他邦の人ハ知難キ所ハ其地の船乗を雑用べし

○船より陸の敵ヘ懸ルにハ潮離レを大事に為スべし左右の手先より飛道具にて敵をすくめて上陸あるべし

○馬を船より下スにハ馬階子を用レども是ハ寛（ユルヤカ）なる時の事ニ軍中なとにてハ船より岸ヘ飛昇（ノホ）スべし又岸迠寄て立ば水中にて馬を船より追下して船に引付て泳がせ馬の足ハ立（タツ）所にて船より直に馬に飛乗て陸地の敵ヘ打懸ル事もあり義経なども此働を為たり是等の業も時々人馬に教置を善トし

○洋中にあり繫りの時ハ船を間近ク並ヘ繫ル事なかれ風起ラば當り合て船破ル事あるべし

○船ヘ幕を張にハ水に浸ル様に張べし矢炮を受留ル事ありと云り

○船中に用意すべき品〻左の如し猶工夫の
上損益あるべし

方針　遠眼鏡
長柄の鎌　長緒の打鈎
長柄の熊手　鉄ゐも
大筒　弩弓
松明　流星花火
石大小　火薬（並）油類
乾キ柴萱

右の外塩噌米薪の類ハ言に不及事之
是迄軍船調度の大畧之此下戦法を載
ス小船小挵合の事ハ此段を見て知べ
し

○船備ハ物見船を真先に出して敵の様子を
見切ルべし尤四方の物見油断ある事勿レ勿
論物見船も飛道具又ハ相圖に用ル旌旗花火
の類を持来べし

○軍船ハ小船なりとも一艘切にて獨働きれ

なる操に心懸べし此故に毎船飛道具打鈎（カギ）其外都ては戦具用意あるべし、たとへば小船にて水主ともに三十五人乗の船なりとも飛道具も三十五用意あるべし、敵間（アイ）遠きハ飛道具にて悩（ナヤ）し近きハ打鈎を打て敵船を引よせ、手詰の勝負あるべし

○船備ハ人数の多少ト船数トに随フ故、備の次第定メ難しトいへども一備の船、二十艘にて不足にせる事なければ備立の次第ハ一には先手、左備、右備、前遊軍、旗本、小荷駄、後備、後遊軍なとゝ立べし然しながら始メにも言し如ク人数の多少ト船数トに因ル事なれば是等を定法とハ云難シ臨時の制ニ出べし但、船ト〱の間ハ船だけ除（アケ）備ト〱の間ハ備だけ除置べし此如ク為ざれば込合て働キ難キものなりト言り勿論、湊川口等に懸ルにハ猶更に船を間遠に置べし、間近しては火船の恐レあり

○敵船ヲ悩スニハ十匁ヨリ二十目迄の筒ヲ以て敵船の横腹、水ニ入ル所ヲ打抜て船中江水の入ル様ニ為ヘし此働ハ小水戦ニも肝要の働之

○大筒ヲ放ス事、小舩ニてハ叶難し大船ニ幾（イク）位（カラ）も仕懸置て拍子ヲ見合て嚴ク打懸ヘし但小船ニも二三十目の筒、一位（カラ）つゝハ仕懸らるもの之但し百石積の船ニ五百目の筒ヲ限リト為ヘしと云リ

○前ニ言し一艘ニて獨働ヲせよといふハ一箇の覚悟ヲいふ也全躰の法ハ或ハ二十三艘又ハ五六艘ヲ一組トして進退離れ〳〵相互ニ奇正の働ヲ致スへし

○敵船ト見てハ無二無三ニ乗懸ケて打鈎、熊手等ヲ打懸ケて乗移ルへし

但し味方の船只一艘ニて敵ト取合フヲ見ても何レありとも其船ニ近キ味方の船二三艘漕（コギ）附て戦ヲ助クへし

○一艘の働前ハ初に言シ如ク水主ともに三十五人乗の船なりし乄武者二十五人ハ水主十人其中一人船の長を定て一船の事を司ら志むへし扨武者廿五人なりし乄十人ハ鉄炮十五人弓にて敵船を見てハ厳ク打すくめ近付なれハ鉄炮の者六人水主二人ハ持前の態（ワザ）を捨て打鈎熊手等を打懸ケ敵船を引寄スへし其時残りの武者飛道具を捨て敵船江乗移り手詰（ツメ）の勝負を決スへし大人数なりとも此法に准シて働前を定むへし

○敵船を追にハ敵船の水主を打へし敵船江乗移りてハ早ク艪の早緒を切へし

○平生の操練に武士足軽ともに艪（ロ）榜（カイ）棹（サホ）等の遣ひ様を能教（オシヘ）置へし上にも言シ如ク敵方にても此方の水主を目懸て討（ウツ）ものハその時戦士艪榜の事に熟シ居ル時ハ水主を不残打殺されても船の進退等に苦マさるものハ此教ハ水戦の要法ハ怠ル事なかれ

○大船ニ櫓ヲ二ヶ所構、四方ヲ厳ク囲イ其数板ニ鉄炮ヲ入ル程ニ刻（キザミ）ヲ十計リ刻ミ置、其刻ミ江鉄鉋十挺計リ入レ置て是ヲ一人前の受取ト為シ敵船江近付たる時人〻受取前の鉄炮十挺ヲ取替し厳ク打すくめて敵船ヲ乗取へし但シ自余の業武者船江妄リニ此働ヲ為ル事勿レよき敵ト見切て此働ヲ為て敵ヲ打取へし扨敷板ニ刻ミヲ付て鉄炮ヲ置事ハ船動揺しても転動せぬ為之船櫓（ヤグラ）の制ハ上ニ出ル五十間船の形ニして小ニ造ルまての事あり

○大船ニ大小の弩ヲ相交て仕懸置、大ハ以て敵船ヲ破リ小ハ以て人ヲ悩シて敵船ヲ乗取へし

○船櫓ニ火桶（オケ）ヲ夥ク仕込ミて敵船江推附、敵の頭上より擲懸て色めく所ヲ乗取へし、火桶ハ陶器（ヤキモノ）ニて擲入（イル）レハ砕ル様ニすへし

○大船ニ石ヲ夥ク積置て自余の小船江落シ

懸て悩スへし

○大風の時ハ前後左右の物見必油断せさる事勿レ敵我ヶ上風より火船を放ス事あり慎むへし用心すへし

但シ火船の用心とて別に仕方もなき事之第一に物見船第二に大船の傍毎に小早船に武士を乗せて備置物見船より火船来ルト相圖なさば此小早の武士とも早〳〵漕（コギ）出シて火船の我ヶ大船江押付（ツケ）さる以前に途中にて乗取（トリ）早く柴萱等を切かくして海中江打入へし、第三ハ諸器物に水を汲溜て大船毎に船端に並へ置て火船来ラハ厳く水を灑キ懸へし、第四に錠綱を切捨て船を風上江転ズへし火船を防くの術、此回になり能く心を鎮（シヅメ）て大丈夫に働へし実に武士の精神の見（ミユ）ル所之慎へし○此下船中の法を記ス

○敵船を乗取たる者ハ上功之

○敵船ト見て無二無三に乗懸ケたるハ其一
船全躰の上功也
○あやしき船を捕得たるハ上功なり
○熊打鈎を打たる者ハ功とス
○大筒にて敵船を打破りたる者ハ功とス
○敵船に囲（カコ）まれたる味方の船を救ヒ出シた
るハ功とス
右賞法
○船中の武器船具等ハ船司の持前にて日く
改メ見るべし破レ損シたるをバ早ク取替べし
油断して軍事に事欠キたるに於てハ其船
司罪あり
○船より陸に上りて水穀薪菜等の用を弁ズ
るにハ船司より印シを受て行べし勿論、帰船の
刻限、一時に限ルべし遅くなる者ハ斬
○番船物見船等面ゝの役目を怠ル事なかれ
怠ルに於てハ斬
○趣意なくして己レが持前の場所を離散シ

或ハ妄リニ上陸せる者ハ斬

○味方の船ハ何レト云事もなき事なれとも別レて同船同士ハ兄弟の如ク親ムへし取てき喧嘩口論等を致ス事勿レ万一止ム事を不得事あらハ鮮陣の後、言上して理非を糺スへし其場ニて相討ッ事勿レ犯ス者ハ双方斬

○繋リ船の時、列を離レて他所ニ繋ル事なかれ背ク者ハ其船司斬

○敵船を見ても臆して乗懸さる時ハ船司ハ云ニ不及、揖取水主迄も斬ニ等キ罪あり

○巌ク敵船を追フ時ハ敵れ謀ニて種々の物を取落ス事あり必拾ヒ取事なかれ若拾ヒ取故ニ敵船を取逃さハ其船司斬

○潮気ニて火薬湿ルもの之心を用て度々乾スへし若怠て火移ラさる時ハ其船司、職を剥

○首を取事を心ニかけハ敵船ニ追付事を主とすへし若他船ト首を争て敵船を取逃シある時ハ其争ヒある者及ヒ船司皆罪あり

○船中高聲を禁ス犯ス者ハ罪
○船具を弄ブ者ハ罪
○酒を飲或ハ賭の勝負事を禁ス犯ス者ハ罪
○船中の兵糧ハ其船〻ニて（多）炊もあり亦兵糧船を廻ス事もあなかれども法ハ一船切ニ炊を善トせる事之

右閲巻より是迄の数條ニて海國の備水戦の法ハ事足レりといふへし此下水戦ニ附ての諸用を記ス猶工夫を加フへし

不亀手（テカヽマサル）の方（水戦第一の要策なり）
○櫧木（レキボク）の油を取て惣身ニ塗へし○又酒二三升ニ胡椒（コシヤウ）十二匁ヲ入テ少シ煎シ手足ニ塗妙なり右寒國江働クニ別して用意をへし

溺死（ミツオボレ）を救フ方
○山雀（ヤマカラ）發羽テモ二羽ともニ黒焼ニして水ニ和シ惣身ニ塗○又石灰を水ニ和シ惣身ニ塗てよ志○又生明礬の粉を鼻中江吹入ル忽チ水を吐出シて活○又皀角子（サイカチノミ）の粉絹ニ包ミ肛門（シリノアナ）中

ニ入レ關元、百會の二穴ニ針灸ス忽活

右何レも一病を經ルをも活スあり

湯火傷（ヤケド）の薬

○杦木（スキ）ノ葉黒焼細末シ鉄漿（ハグロ）ニ和シ傳（ツク）○又石（セキ）

膏末（コウノコ）、胡广（コマ）油ニ和シ傳○飯を黒ク焼て胡广油

ニ和シ傳○胡瓜（キウリ）を細カニ搗爛（ツキタヽラ）シぬり付ル○

又人家庖厨（ダイドコロ）を流ス塩味（シホケ）のある下水中の泥ヲ

付てよし○白粉ヲ卯白ニ和シ付テよし

悪風を知ル口訣

○雲横ニあか引て日色赤キハ悪風あり○月

月朦〱として暈（カサ）あるハ悪風あり○大白星見

へ雑キハ悪風○西南ニ参星動揺（ウコク）するハ悪風

○諸の星ひら〱として動ク様なるハ悪風

○雲行早クして箭（ヤ）の如キは悪風○禽鳥の高

ク飛ブは悪風○天色不の暗キは悪風○人身

頭熱するハ悪風ありと知べし

右候風の大畧之此下合戦の方ニあれか

らされども心得の為ニ唐、阿蘭陀等の船

の称呼又も其船々ニ居ル役人の職名を書記ス是又臨時の博識ニして一急用を弁スへき也

○唐人ハ船を呼て船ト云又鵬ト云、其船ニ名ル事、何ヽ鵬ト云（日本ニテ何ヽ丸ト名ツクルカ如シ）日本ニ云、傳馬船を杉板ト呼之○唐船の三役人ハ船主、夥長總官之此三ツも唐船の頭役之○阿蘭陀人ハ船を呼て、シキツプト云、傳馬船を、バツテイラト云、阿蘭陀船の三役ハ、オツフルホウフトン（カピタン）・シケツフル（船頭ナリ）・オツフルステユルマン（按針役ヽ）此三ハ阿蘭陀船の頭役之亦

○初発より茲ニ至て小子が千古獨見ニして日本、武備の綱領、斯ニ在ト竊ニ誇ル所之然ト云とも文面而已を悦て器械を不具ハ善の善ニあらず又器械を具ても操練を[illegible]ハ亦善の善ニあらず文面を能會得し器械を備、操練を善して而後、始て善の善ト云へき也都て軍事ハ陸戦なりとも操練なき人数ハやゝ

ら戦に成事多し況や水戦ハ船の懸引も一身
の進退も不自由至極なるものなれバ是非に
操練なくて不叶事也然ル故に水戦の操練ハ
操練中の又大切なる操練と知べし必怠る
くせにする事勿し然と云ども一向に操練而
已に泥メバ亦血戦に鈍くなる事あり能彼是
の交を呑込て操練、血戦二ッなりし全きを妙
ト為べし扨既に海國水戦の義を述し上ハ亦
畧陸戦の事をも詰べし因て第二巻より十六
巻迠を書記して以テ大小戦闘の大較を示ス
讀者忽に為事勿レ

第一巻終

海國兵談第二

陸戰

既ニ水戰ヲ會得シテハ陸戰ノ法ヲ呑込ヘシ先戰法ニハ戰闘ノ法組ニ日本諸流ノ戰法ハ大槩法組極リテ鉄炮、弓、長柄、武者ト四段ニ立テ六十間ヨリ三十間程迄鉄炮ニテ拵合、ソレヨリ十四五間ニ詰ル迄弓拵合、ソレヨリ長柄ノ拵合ニテ鼻突ニナリ、ソコデ武者ノ勝負ト切組大槩定リヰル之當時頃ハ世人多ク

ハ此切組の外、合戰の次第ハなき事ト思フ人も多けれども接戰の懸り口、是のみに限りぬる事なし猶も切組にて違へぬる敵に出逢なば大に狼狽ル事あるべし惣て軍ハ先（セン）を取にあり先を取事ハ人の膽（キモ）を奪（ウバウ）にあり其法六あり下に記ス異國勢の備を碎にも猶この術を施スべし

○敵當世流の備立にて楯をも不用、押來ル時ハ兩（モロ）懸り或、手詰（テツメ）懸に宜し亦楯を用ヒ云、鉄炮を厳ク備て押懸ラば玉碎（タマクダキ）に如ハなし、亦敵楯を不用鉄炮のみ數千挺備て押懸ラば指矢（サシヤ）懸に宜し亦飛道具を影ク備て押懸ル時、味方に飛道具も不多、楯もなく其上無勢なる時ハ乗（ノリ）崩（クヅレ）に如ハなし、亦何レの備をも押崩（ツツ）ス車懸（カヽリ）の法あり但シ平場にのみ用る之

○兩懸（モロカヽ）りといふハ楯を一面に突（ツキ）並其陰（カゲ）に云、鉄炮を等分に組合セ鉄炮少く打懸なから押詰（ツメ）て敵間（アイ）十四五間に成ぬる時、鉄炮を一洗る

べに打懸、弓ハ矢接早（ヤツキハヤ）に二筋ほど、射懸て敵を射すくまし、ひるむ所を足軽の後（ウシロ）に扣へたる武士、得道具を打振て前後を不顧、踏込く切立へし弓鉄炮の足軽も皆其持道具をもつてそくに懸て武者に續イて切込之是を両（モロ）懸りといふハ弓鉄炮の両懸トいふ心之

○手詰懸ト云ハ足も楯を一面に突並て膽氣（キモ）壮（サカン）に力量ある者二三十人、六七十人、乃至一二三百人も撰て各大太刀、大棒、大薙刀等を持セ置敵間三廿間許（カリ）に成たる時、楯持、足を早メて無二無三に敵間二三四間に押詰て足を踏止たる時楯の陰より件の壮士、少人数なれハ一口、大人数なれハ、二口にも三口にも成て剛氣無慙に敵の中江割て入、縱横無碍に切立へし、後勢是に續て驅立ル之是味方に飛道具なき時の懸リ口に殊に宜シト云リ

○玉碎トいふハ楯を一面に突並、飛道具に大筒（ツヽ）を雜へて備置、小筒を四度路（シトロ）に打懸なから

敵間十四五間に押詰べし此時有合大筒を一
はるべしと發し懸て敵の膽を冷しぬる所江小
筒を一齊に打懸て愈（イヨヽ）敵のひるむ所江烟（ケブリ）の下
より武者も足軽も無二無三に切込て乗越て
ゝ進む時ハ敵を破ル事疑なし扨飛道具の數
ハ人數の多寡に随フべし大筒ハ鉄筒鉛玉ハ
重くして取廻不自由之此ハ短町の場にて敵
隊を砕く迄の事なれバ木筒煉玉を用べし是
軽くして便利之制法ハ器械の巻に出せり見

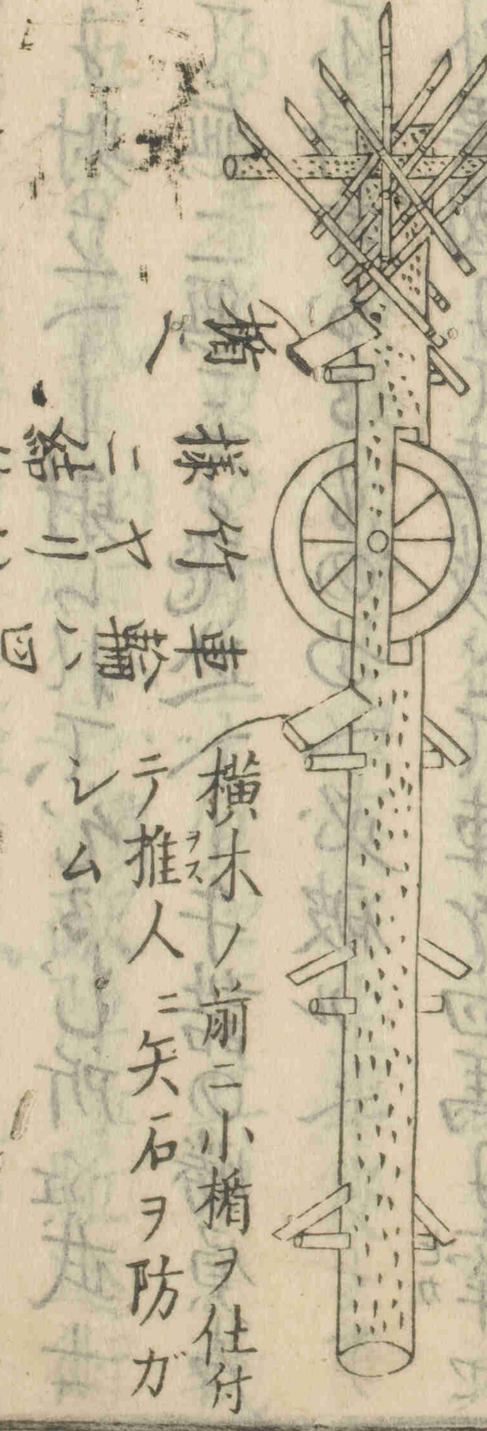
合スべし
(人)指矢（サシヤ）懸りといふハ敵鉄炮を彫ク先に立て
押懸リ味方を打ひくむるなれバ此方にハ射
手數百人を揃て矢種を惜まず指矢に射懸ケ
敵を射すくめて鉄炮を放サしむる事なかれ
其時左右より横を入て破ルべし此指矢懸リ
ハ弓家第一の働にして鉄炮打ハ面も振向（フリムケ）難
キ懸リ口なりと聞傳なり
([illegible])乗崩といふハ敵飛道具を彫ク備て透間も

無、押懸ル時、味方ニ飛道具不足なる歟、亦小人數なる時ハ尋常の如ク軍をしてハ必打負ルものなり其時ハ乗崩ニ如ハなし其法をよき馬を前ニ立て二三十騎又ハ五六十騎乃至百騎二百騎なりとも君の大事此一戦ニありト命を塵芥よりも輕レ忠義の一念ニ軍神を勸請仕捧て前後を不顧、無二無三ニ敵の隊中江乗込ヘし是ニ從ひて歩兵も切込ム馬の入様三等（ミトオリ）あり左ニ記ス

騎馬の三十も五十も一隊ト成て敵隊の真中江乗込ム是を一口入ト云又二隊ニ分レて備の両端（ハシ）より乗込（コム）なり是を二口入レトいふ又二隊ニ分レて一隊ハ敵れ正面江乗込一隊ハ敵の脇江乗廻シて横合より乗込なり是を廻入トいふ又右何レも馬を入ルニハ人數の厚キ方江乗廻スヘし薄キ方江乗込時ハ打殺サるゝものなりト云り

○車懸りトいふハ下に圖せる所の獨輪（ヒトツワ）の長車を拵て一車を八人にて推之此車を備に應して十車或ハ二三十車も拵て陣前に推出し敵間十間許にせまる迄ハ静（シツカ）に進ムへし扨太鼓の相圖に隨て無二無三に敵の隊中江推込へし人をも馬をも推倒（オシタオス）がり夫に續イて武者切込時ハ勝を取事疑なし尤此車の推方ハ能操練あるへし

竹鑓（ヤリ）ヲ乱散ニ結付ルヘシ


木ノ長サ二三間
楯ノ様ハ結付ベシ
竹ヤリハ人ノ面ヘモ中ル
車輪ハ四尺許ニ作ルベシ
横木ノ前ニ小楯ヲ仕付テ推人（ヲス）ニ矢石ヲ防ガシム

此車を推者ハ足軽百姓等の勇者を撰用へし

○敵より馬入レを為スル時ハ早於場中江出向て馬の前足を薙ナグへし此方の備江乗込レてハ必崩色附ものなりと知へし

○敵長柄を夥ク備て押来ラば先射手を進て散々に射立へし射られてひるむ所江武士抜連レて無二無三に飛込へし手詰の勝負に長柄の不得手なるものゆへ必破ル之

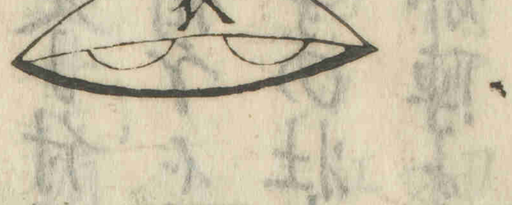
○右の外異國にて車戦とて車を四馬に牽ヒカセて車の上をば生牛皮を以て張固メ其中に十人許ハカリ載て敵陣江馳込之夫にはしひて騎馬も歩卒も突懸て敵を破ル術なりヌケレイキスブツクに小家の様に拵て四方を生牛皮にて張固メある者を象の背上に負セて其中に戦士二十五人を載て（内一人ハ象ツカイ之）敵陣江駈込術なり、箇様の事ハ将師の機轉次第、土地にも撤りを能計て制作レて用へし兎角合戦の道なる世間になき形カタを工夫して勝を取事肝要之（徂徠先生モ屢此意ヲ述タリ）

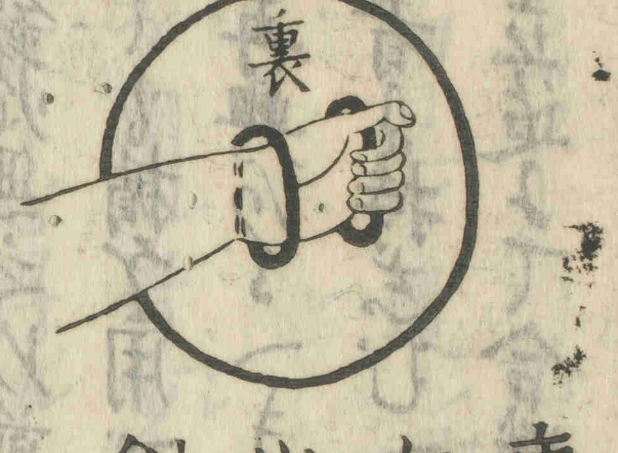
○敵ト對陣して戰を決セント思フ時ハ先戰地を見立へし地形ハ戰の佐なれバ疎にする事なかれ地形の事ハ九巻目に記ス

○備を押出スにハ必卒尓にする事なかれ隨分四方江物見を遣シ碍（サハリ）なきを知て後に押出へし

○近世楯を用ル者少（マレ）し是一向に力戰のみを合戰の主意ト心得ルより楯などを用るハ迂（マハリ）遠（トオ）の事の様に思て合戰の仕形古より輕薄に成ることゝなり其上近世ハ鉄炮流布して合戰の次第鉄炮無之以前より一際（キハ）むごく成れり是に付ても楯を用べき事良将の戰法なれど楯をバ再興あるべき事ハ扨楯をバ百姓商人等の壮者に持しむべし此役目ハ只楯を持て前陣に立追て合戰に携ル事なれバ百姓町人等を用て無異儀事なるべし亦一枚楯に穴を穿（アナ）チ鉄炮を貫て直に鉄炮足軽の持（モツ）しめり亦唐山和蘭の戰法に生牛股を以て笠の

形に拵ゑる楯を戰士毎に持せる也是にハ昔古手練のある由也其圖ハ左に出ス也此外楯の制作樣〻あり器械の巻にあり





唐に藤牌ト云、和蘭にハレケルドト云、左手に是を以て面を防キ右の手に劔を以て敵に當ル也

○近世大筒出來して種〻の奇術ありと云ども只城攻與籠城にのミ用て放戰に用ル事を不知ハ兵を提ル者工夫して大筒を放戰に用ひた手ひどき軍立なるべし工夫を加フべし

○双方人數を押出ス時ハ初メに物見を出して能敵の樣子を見切、懸リ口の了簡を定メて人數ヲ押出スべし扨敵間五六町に成迫ハ平生の足に押行、四町計に成て金を鳴して人數を止て居（オリ）敷しめ新タに太鼓を打て人數を進むべし其法太鼓一聲に一歩（アシ）づゝ進ムべし武（モノ）

間詰（アイ）ル程、愈此法を嚴にせべし一々然して正整せさる之

○敵を踏破て逃ルを追事一町半二町にて追止ルべし追行時、備を乱し足を乱して馳駈する事なかれ左右を見合して追行べし書經に不愆于六歩七歩乃止齊焉不愆于四伐五伐六伐七伐乃止齊焉ト云も聖人の軍法にして長追を禁しめる事也金を鳴せて速（スミヤカ）に足を止べし不止者ハ罪ス

○長追を禁せる事ハ敵必死（レニ）に成て取て返し死物狂（クルヒ）の働をせる時ハ却て手に余ル事あるものなれバ然ト云ども何國迄も追詰て根を断（タチ）葉を枯ス見切ある時ハ鼓躁して追詰べし義與太閤西涼州の馬超が働などを考見て知べし

○逃ルを追に心得あり旌旗齊ハ足並も不乱士卒後勢をかくしとして逃ルハ真の敗走にあらず虚敗（ソラニゲ）ニ追事なかれ妄りに追て伏兵大

返レに逢て却て敗軍する事あり慎むへし又旌旗も乱レ足並も不正、兵器なと取捨ルは真の敗走也追詰て打果スへし

㊉突懸り強き敵をば己レ虚敗して或は伏を設ヶ或は大返しして討取事あり然ト云ども敵将心得ある人なれば虚敗の手に不策もの也然ル故に虚敗の仕様あり旌旗を乱し兵器を、捨高足して走ルへし敵将智ある故却て此手に乗事あり惣て此類の事は将才の淺深にあるへし

○己レ虚敗する時は其相圖には旗馬印等を伏（フセ）ては起し、起シては伏なから走ルへし尤兼ての操練に此約束能々教へし

○實に逃る事を耻ト而已おもへるは戦の道に暗き故也勝負は時の運によるものなれば名将ト云ども負ル事もあるもの也其時守返（モリカヘ）ス見詰なき時は逃足出して逃ル事もある也惣て名将の逃ルは其逃様甚上手なるもの也

漢の高祖ヤ尊氏卿の逃ル様をミて知へし然ト
云とも逃ル事を心懸よと教ルにハあらす時
有て上手に逃よと云事あり
○敵を追放（ハナシ）てハ其手の侍大将、番頭、昇（ノボリ）馬印、を
其處に建定メて人數を經メ手負死人をしら
べ功の淺深を吟味して悉ク記録シ主將の上
覧に入べし
○敵を破りぬる侍大將番頭江ハ時宜に因て
即時に感状を賜ル事あり亦將士ごとに禄（ホウヒ）を
賜事もあるべし
○敵を破りて慥に味方の勝利に於てハ旗本
にて五ツ三の貝を吹立て勝鬨を挙べし是軍
神を祭ル心にて且軍の勢を添ル術也
○手負にハ介抱人を添藥を賜ヒ討死ハ子弟
無とも母妻女等江跡式無相違申渡し嗣子ハ
目に公より定ムべし
○先手敵に追立られんトして進兼ル時ハ早
ク二の見より横を入へし是則奇正の術也既

に追崩されて足を乱しぬる時入レてハ守返
レ難きもの也と云り又先手の崩レ色をミて
早ク横合より馬を入ルもよし何レに此方よ
りて横を入べく見ル時ハ敵の二に見も推出し
て相手組（クミ）もの也其時ハ敵の二に見江目を不
懸、味方の一に手ト相手組（クミ）、敵の先手に備裏を
第一に蹶（ケ）立べし惣てかやうの働ハ心きゝて
神速に為べし
○先手二に見ども追立られて旗本江崩レ

懸ル時ハ旗本の楯を一面に突並、楯の陰より
長柄を筋違（スヂカイ）に半（ナカバ）指出レ石突を土江突止メ
其身ハ居敷て嚴ク固メ崩レ懸ル味方を一人
も旗本江受入ル事勿レ其ゆゑに右備ハ右よ
り廻り左備ハ左より廻りて挾ミ討べし亦右
の如かる時ハ味方の前遊軍早ク一方江駈入
し越働（コレハタラキ）をなすべし越働の仕様ハ味方を追来
ル敵の先手をば目に不懸、敵の旗本江無二無
三に突懸りて必死の一戦を遂（トグ）べし此働ハ電（イナ）

光の如なへし此如クなる時ハ却て味方の勝利（ヒカリ）と成之疑フ事なかれ何レに機轉ト武勇ト有りと知へし

○敵より此方江越働を仕懸ル時ハ早ク其様子を見切リ一二の備ハ初の如ク敵ニ當リ左右の備の中、何レなりとも近き方越働の敵ニ當ルへし勿論、遊軍歟又ハ旗本の人数を少シ分ル歟（カ）して越働の敵江横を入へし

○川を渡ル敵をハ半渡（ナカハワタル）を討へし半渡とハ敵勢半分程川江入たる時を以テ之

○押来ル敵を待受て討に六の圖有り一には伏を用て討、二には中途江出向て討三には屯場江着て未タ列を成さる處を討、四には兵糧を使ハさる所を討、五には折着の夜を討、六にハ着陣の翌朝未明に討へし是待軍の大法之

○待軍にハ味方の屯場（タムロバ）に虎落（ニセカカリ）を二重も三重も振置、鉄炮、大筒、弩弓、等を備て待へし

○田單、火牛を用、韓信、嚢沙の計を成、李靖、艾葉

に火を付て諸鳥の足に結付追放て敵の営を焼、龙傳に虎の造り物を陣前に押出レて敵の馬を驚かして破りたる事もあり此類の事ハ児戯に似たれども其功甚大也、才覚次第制作すべし

○時宜に因て小荷駄車を真先江推出レ車の蔭より弓鉄炮にて打すくむる事もあるべし敵押来ルとも車に隔られて進得ざるなり其時味方宜キ汐合を見済して無二無三に切立ル時ハ敵を破ル事疑なしと云り惣て此類の事猶幾許もあるべし呉人ハ不亀手（テノカヽマヌ）の薬を制作して冬の水戦に利を得たる事もあり皆良将一時の謀才より出ル事ト知べし

○何レの戦場江も近習小姓等の中より鑑軍（メツケ）ト志て二人を一組トして二組も三組も遣て其日の合戦の次第又ハ諸軍の剛臆（ツヨレヨハレ）共に記録して大将江上ル也、是ハ頭〻より申上ル趣ト附合するもせさるもを見合ル為、又ハ諸軍士

己レが頭の外に鑑軍（メツケ）ありておもへば一入油断なく戦に身を入ルものなれば彼是の為は用ルなり

第二巻之終

海國兵談第三

軍法付物見

軍法とハ軍中に定メ置所の諸法度之軍法嚴重ならさる時ハ人数一致の力を出サさるものなり惣て軍ハ大勢の人数を一身の如ク働カせるものなれば法を嚴重にして縛（シバル）にあらざれば斉一ならさるなり惣て能兵を用ルものハ法を嚴重に立ル之　日本の軍ハ法度粗（アラ）き故斉一ならざる軍多し尤に法の大略を

記ス将たる人能會得して工夫有るべし

○貝太鼓を聞時ハ前に劔の山有りとも進ムべし進マざる者ハ斬棄べし

○金を聞時ハ目の前に只取（トル）首有りとも踏止ルべし止ラざるものハ斬

○傍輩同士ハ相互に危（アヤウキ）を助合ふべし別して頭分大将分の者ハ危を見捨ル者ハ斬

○物見の張番亦ハ夜番等に當て其職に怠り或ハ睡リ又ハ守り場を立退ク者ハ斬

○血戰の場に於て鐘を鳴サざるに自ラ退ク者ハ斬之

○城攻の時乗べき圖を乗兼ル者ハ斬

○籠城の時妄りに己レが持場を退ク者ハ斬

○根無言（ネナシコト）を言出レて味方の氣を動レたる者ハ斬

○敵ト書通は言に不及音信贈答レ或ハ妄に敵ト詞を通レたる者ハ斬

○盗首仕レたる者は斬

○人れ討ゐは敵を賊しり理（リ）不（フ）盡（ジン）にて争フ者ハ斬

○公用にあらずして妄りに己レが持場を去或ハ陣小屋等を離散する者ハ斬

○約束の時刻日限等に遅参の者ハ斬

○私に相争（アラソウ）て高聲シ或ハ刄傷に及フ者ハ双方斬

○妄りに先懸をへかゝし犯ス者ハ斬

○随身の兵器紛失の者ハ糺（タヾシ）の上、斬

○忍足に陣中を通行する者ハ縛（シバル）、或斬

○妄に備の中を奔走する者ハ縛

○妄りに高聲する者ハ縛再犯ス者ハ斬

○軍中酒を禁ズ、犯ス者ハ縛、再犯者ハ斬

○博奕と云に不及、妄に賭ル諸勝負する者ハ縛、再犯ス者ハ斬

○馬を取放レて備を騒動する者ハ馬を取

○味方に敵ト内通の者などを聞出ス時ハ速に本大将江言上すべし遅くするに於てハ罪

あり又事に因て即坐に斬

○随身の兵器不調の者ハ糺の上斬不調トハ弓あれども弦なく鉄炮あれども引金損じたる類を云之此類の事悉く武士の大ニ不覚なるべし

○商價婦女の類ト妄りに詞を通じたる者ハ縛、再犯ス者ハ斬

○右罰法の大畧なり猶将帥の心に因、又ハ國風なとにも因て宜く定むべし且亦賞スべき條々あり左に大畧を記ス

○先手敗北して既に惣崩に成べき時守返シて味方敗北せざる時ハ其守返したる者を上功トス

○敵の主将を討たる者ハ上功之亞ニ大将分の者を討たるも上功に准ずる

○懸リ口に一番鎗を入たる者ハ上功之

○除口の殿（シンガリ）を上功之

○味方の大将分の首を敵に取レたる時其首

を奪返シぬる者ハ上功之亦大将分にあらずとも敵に取レぬる味方の首を取返シぬる者を功トするなり

○味方の旌旗金鼓の類を敵に取レぬる時奪イ返シぬる者ハ上功之

○主人ハ云に不及、大将分の者の危（アヤウキ）を救ヒ、又ハ命に代ぬる者ハ上功之厚ク子孫に報（ムクユ）へし

○川渡リに瀬踏志ぬる者ハ上功之

○城攻に一番乗の者ハ上功之

○主将ハ云に不及、大将分の者敗走する時、身を離レず何國迄も付纏ぬる者ハ上功之

○敵方江間（カン）に遣シて敵の計畧を聞出シて言上致シ却て味方にて謀計を為（ナシ）て敵を破リぬる時ハ其間（カン）に行ぬる者上功之

○敵の間者を捕得ぬる者ハ上功之

○敵の旌旗金鼓帷幕の類、惣シて敵方の武器を奪取ぬる者ハ功之

○籠（ロウ）城に城外江使して其趣意を遂（トゲ）ぬる者ハ

上功之

右賞法の大畧ハ此賞罸を都て軍法ト云ハ猶工夫ノ簡して法を立べし然レなから軍法ハ細密ニ箇條の繁多なるハ不好（コノマ）事之只肝要ハ事を箇條少（スクナ）ニ定ムへし扱定メ置なる法ハ少しも相違セる事なかれ都て法令ハ相違のなきを主意トセる之相違ある時ハ法軽シなる、法軽シ成時ハ人不恐、人不恐時ハ法を守ル者無して不齊一ハ不齊一ハ兒戯の軍立之ト知へし將なる者法を嚴ニせんハあるべからず然ト云とも法をも嚴ニすべし我意をも嚴ニせべからず福嶋正則ノ如きハ我意の嚴なる故ニ國を失ウト云しの之功疑維重罪疑維軽ト云事、聖人の法ニ志て意味深き事なるべし將師なる人是を忘ル志となかれ

物見

○物見ハ軍の肝要なるものにして勝敗の係ル所なれバ可重の第一也。まづ物見に大中小の三段あり。大物見とハ本大将の直に物見せる事也。中物見とハ侍大将番頭なとの為（スル）所也。小物見とハ一二騎出て物見せるを云也

○中物見以上ハ直に取合に成事あり。覺悟あるべし。覺悟とハ兵器を備ル事なくて義貞足羽合戦の大物見なとハ事（コト）を卒尓に為るによつて大変を引出せり。可慎〻扨物見によつて直に取合に成ぬる時ハ其事を本陣江知せて後定メ有べし

○小物見に出ぬる時敵によりて勝負を望む者あらバ主用にて物見に出ぬる故まづ立帰て言上し即時に馳来て勝負もすべしと云て互に名乗合且鎧指物等相互に見覺（ミオボヘ）て立別ルべし扨實に立帰て勝負を決せる事ハ時宜に見合に因べし。不㆓立帰㆒とも大なる恥辱にもあらざるべし。大将の下知次第なるべし。扨又初メの如く

釈（ワケ）ヲ語りても敵方兼知なく打て懸ラバ其時ハ無二是非一無二無三ニ勝負ヲ決スヘシ然レども此仕方ハ十ニ八九不好（コノム）事之物見の用ヲ主ト為ヘシ但三人なくバ二人ハ勝負ヲ為シ一人ハ立帰て其趣ヲ言上する事もあるヘシ是亦初メより帰り役ヲ定メ行ヘシ

○つなき物見ト云ハ遠方れ所ニ用ユ是も幾所（イクトコロ）よりも人ヲつなき置て段〻ニ申續事なりて場先（バサキ）の事ヲ早ク本陣江報スべき為也

○唐山（カラ）、和蘭（ヲランダ）等の軍事ハ大小悉ク物見ヲ用ル之然ル故ニ麁忽の破レヲ取たる事なし日本れ軍事ハ物見の事甚粗ニして入用の時ニ計物見ヲ用ル之此故ニ戦ヲ善する大将も足本より不意の敗乱ヲ受たる事多シ武田か本陣江上杉ニ仕懸られ今川ヶ旗本江織田氏ニ切込レたる事なと皆物見ニ粗キ故ト知ヘシ

○大小悉ク物見ヲ用ルトいへ小ハ備ヲ張て敵

ト戦を取結ブ時ハ勿論ニ押行にも前後左右の物見を用ヒ、亦陣を取敷て居ルにも四方に物見怠ル事なし其外萬事皆物見を用へし是慎ミへし

○深ク敵地江物見に行ニは或ハ商人ト成、或ハ草鞋（ワラジ）を逆ニ着（ハキ）、又ハ獣足を作て着事なとしたりと云リ扨又物見ニ出て見切の次第ニ習ありて左ニ大畧を記ス猶工夫あるへし

○敵國の貧富強弱、又ハ士民の國主ニ服せるか不服かの様子、或ハ其土人の模様（カタチ）等を観察せる事第一の心得也

○敵の虚實を見ルへし虚とハ人數立、不正整、旗の手動キ、軍士妄りニ四方を見廻シ或ハ持ツ所の兵器を玩ヒ又居敷もせす或ハ首（カウベ）仰（アオイ）て内冑白ク見（ミヘ）或ハ武者雜語（ドヨミ）せるハ皆虚也

○實とハ人數立正整ニして皆居敷、又下目（シタメ）して妄りニ五躰を動揺せす持ツ所の兵器をも不玩、旗の手立派（リツパ）ニして妄りニ聲を立さるハ

皆實之

○敵地江入てハ、まづ接戦の足場を見立べし地形ニ順逆あり第九巻目地形の條ニ記ス

○敵勢の多寡を積ルへし是ハ平生見習ヿニあらざれバ積り難キもの也操練の時、心を用て見習ヿべし

○敵の備れ形を見切べし懸り口ニ心得ある故也備の形トハ魚鱗、鶴翼、鋒矢（ホコヤ）等の形を云也

○多騎少歩、少騎多歩れ様子を見切べし

○山川険難の場を見切べし

○武間（モノアイ）の町積あるべし是も平生見習ニあらざれバ見難キもの也心かくべし

○田の浅深を見切べし畦（クロ）崩（クヅ）るゝは深田也植田の並（ナミ）不揃なるは深田也刈穂の長キハ深田也都て水國の田ニハ深田多ト知べし

○川あらバ渡ルへき所を見切ルへし石川ハ廣平ニして大石の無所浅瀬也砂川ハ直なる所ニ浅瀬ありて、長刀形（ナリ）の所ハ堀レて深キもの

之泥川ハ狹(セマキ)所深キもの之、岩川ハ渟(スル)もの之是
等大聚の見切がねト云ども様子を知ざる川
ハ按内者を用ル事第一の了簡之ト知べし
○伏の籠(コモリ)ある場所を見切べし是亦習あり森ハ
林等ニ鳥の飛騒クハ其中ニ伏ある之、獸走リ
驚クハ伏ある之、飛鳥の驚キ亦ハ行雁(カウカン)列(ツラ)を乱
スハ伏ある之、森藪等の近邊の草を踏藉ある
ハ伏ある之、草野ニ虫の鳴聲(ナリコヘ)無ハ伏ある之此
數條、伏を察スルの大聚之、

○敵ト對陣志ある時ハ敵陣ニ平日立ル所の
飯煙(メシケフリ)の多少を能見覺居ルべし常ニ勝(スクレ)て多キ
ト常ニ勝レて少キとハ敵陣ニ何事か支度ある
之能心を配て常よりて多少の飯煙あらバ細
密ニ聞を遣して敵の様子を探ルべし武田上
杉川中島對陣の時武田家の飯煙、常ニ勝レて
多キを上杉方ニて見付ケ武田が人數を廻ス
事を察知志ある事もあり可思
右物見の大畧之上ニも云如ク物見ハ勝

敗れ係ル所なれバ怠ル事勿レ別レて押
前陣取細道等ハ物見ニ念入べき事也

第三終

海國兵談第四巻

戰畧

戰畧とハ孫子ニ云ル所の筭を精クして其上ニて謀慮をめぐらし戰ニ勝べき手たてを工夫して軍をするを云也此戰畧ニよらざる時ハ拙き軍を為ル事ニなる也將たる者能〻思慮を尽て工夫を附べし

○戰畧亦ハ軍略とも云也然ルニ世人軍法ト戰略トを取違たる人多シ夫軍法トハ軍中の

謂法度にて相定ノある掟の事ハ戦略トハ上に云如ク戦に勝べき手あてを工夫して軍する事ハ俗人の所謂軍法ハ戦略なりト知べし

○戦略に精かるべき事を欲せバ和漢の軍記を多ク見て自然ト會得あるべし何レにも多ク先蹤を知て其上に寂然不動の勇機を修シ得たる人にあらざれバ急速臨時の場にて胸中より湧出ルものにあらざれども初学の為に大略を先に挙ルハ猶工夫あるべし

○孫子に兵ハ詭道ト云事ありて接戦の妙境にあるハ然ルに聖人の兵法を學ブト云人間有て此詭道ト云事を殊の外忌嫌（イミキラヘ）ども、まづ不可争、扨詭ハいつはりトよむ字にて虚言（ウソ）の事なれども此にて、虚言いつはりト見てハ適當せざるハ只軽ク、そてある事ト見ルべし其趣意ハ東を討躰をして西を討、鷹狩（タカガリ）をする躰をして直に軍を仕懸ル事などにて、そてある事をして勝易きを取ル為れ一時の謀を指スハ

○閒（カン）を用る事皆一時の權謀（ケンホウ）にして定法なし然（シカレドモ）ト云ども閒を用ルの大略を知ざる時ハ用ヒがたきものぞ孫子に五閒を云り郷閒、内閒、反（ハン）閒（カン）、死（シ）閒、生（セイ）閒之郷閒とハ其郷民を閒に用ル之内閒とハ敵の身内の者を用ル之反閒とハ敵にアて此方江来セル閒を却て吾が閒に用事之死閒とハ漏ス閒敷趣キの事を漏レて敵方江も風聞させ味方にて漏レたる者を尋出シて是を殺シ敵に實の様に思ハせて別に謀をめぐらしを云、生閒とハ閒を遣ハシて敵の容子を見聞せる之生て帰ル閒ト云事之都て閒ハ謀計の主となるものなれバ戦略第一の物ト知へし

○夏、南を不征、冬、北を不伐ト云事も心得居べし義貞の北國落なども時節遅（オソナ）ハりし故寒氣の爲に謀相違して敗軍に及へり　日本の中にてハ焦ル、程の南國ハなき事なれども北國江働ク事ハ時節を考合スへし

○早リ雄（オ）にして強キ敵なれども味方懦弱（ジヤク）の躰をなして敵を驕ラせて討事あるべし

○終日合戦しても勝負決セずして軍を止メ後日勝負を附べしと約せる時抔ハ、昼の軍に味方の宗徒の者ども多ク討レて味方、大に疲レたて抔ト流言して敵の氣を驕リ怠ラせて急に夜討せる事もあるべし

○敵短慮の大将なれば此方よりて無礼の振舞を仕懸て怒りを起サセ無益の軍さゝせて疲ラかゝ其弊（ツイヘ）を討事あるべし

○悠々不断にして懦弱の敵将なれば短兵急に挫クべし

○怨の事ありて軍を起シたる敵なれハ念頭に申ヨけかこして和睦を取つくろい油断したる所を討事あるべし

○残暴にして村里を犯シ掠ル者をバ勢（イキホイ）を強大に張懸ケ威武を示シて挫クべし

○諸方具足志たる敵なれバ軽々敷、軍を仕懸

ル事なかれ能工夫して働へし

○大敵を見てハ侮こりし事古の勇将にある事にて今の不簡にてハ少ク野猪（イノシシ）武者に似タル様なれども敵の大勢を見て臆スル心氣露むかつて生シても其氣持にて取懸てハ負ル事疑なし然ルに味方不殘一致して大敵を侮ル心に成て突て入時ハ小勢を以て大勢ヲ追崩タル例多シ何レニ力戦ハ生（イキル）ヲ忘レて只死（シテ）ヽく（く）ト切込事第一の心懸ニ謙信清正、忠勝抔是ニ

○小敵を見て不侮ハ良将の慎なりト知へし古も侮り輕シて小敵の為に大軍を破（ヤブラ）れし、ためし多シ能考見へし

○敵地江踏込て戦フにハ肝要の地を見定まして早クこれを取へし肝要の地とハ取ル、時ハ敵方にて難儀に及フ所を云ニ或ハ米倉又ハ城郭を見下（ミヲロス）高所、或ハ運送の道筋、又ハ大社大寺等ニ

○戦勝て次第に地を略して敵國江踏込時我

をたのむ死或ハ不從して戰べき氣色ある土邑をバ鏖（ミナコロシ）にして猛威を示シ敵國を手に入ル事もあるへし又殺伐乱妨を嚴ク禁シて寛仁の德を示シ或ハ年貢を薄クする約束なとして敵國を親附せしむる事もあるへし此二ツハ時勢ト敵國の政事風俗を詳に呑込にあり されど弁がたき所なり其大緊を云ハゞ初メの手合にハ鏖にして軍威を示シ其後ハ殺伐を禁シて親附せしめ又時宜を見合て折ゝ猛威を示ス事、敵地を略する大法なるへし只所要ハ寛猛の德を相兼て時宜に隨て施ス事ト心得へし片寛片猛ハ一方ぎくなる故、忌事ニ

○降参ト称する者に真の降参ありて大將を衒（テラ）ウ為に降するあり他の味方ト示シ合セて裏切する為に降するあり此外謀計の降参、間（マヽ）有之事ニ能察スへし真の降を殺ス時ハ見懲（コリ）して以後降参する者無、然ル時ハ地を略シ難キへ亦偽の降を助ケ置時ハ害を受ル事あり詳

なすべし是を試ルにハ降將の甲冑等に心を附べし目印にかゝるべき異形の物を着したるハ必意味あらば降人ハ先縱あり切て害を除べし亦偽の降參ト見ても速に領承して或ハ城を受取、又ハ人数を奪イなとして其上に彼ノ降人を或ハ撫育シ又ハ畏服せしむる時ハ真の降人ト成事もあり何レにも主將の器量にある事ハ

○敵國江押入てハ其國中に豪傑、用ヒられずして蟄して時を待者もあるべし或ハ功徳ある者推沈メられて上に恨を含ム者もあるべし亦才智遅ク國中の事を呑込たる者用られずして引籠り居ルもあるべし此類の者を聞出サせ召出シて念頃に持成國土の様子合戦の手だて方略等尋問て厚ク遇スべし大に強を得の道ハ扱又右の如ク敵國の人を我が手下に用ル事ハ其國の士民を安堵せしむる為にも成事ハ兎角敵國江押入てハ士民怨を生

せさる様ニせる事第一之後ロニ氣遣(ツカイ)ありて
ハ思フ儘ニ敵城も攻難キ事之能考へし

◯都て戰の妙ハ奇正を能呑込ニあり奇正と
ハ仕手脇ト成て働ク事之敵ト相手總を正兵
トシ横を入ルを奇兵トス然レとも無形ニあ
らされハ妙トせるニ不足之無形トハ正変シ
て奇トなり奇変シて正ト成て敵をして我ヵ
奇正を見ル事あたハさらしむる事之扨如此(カク)
言をもて妄リニ奇兵の働をのミ貴フ事ニも
あらず元來正兵ニて堂々齊々として挫クへ
き事なれとも或ハ人數の多寡亦ハ敵方猛将
謀者等ニて堂々齊々ニのミ擬作(アテカイ)難キ事もあ
るなり是奇を用ル所之既ニ奇を用ル上ハ已
レか奇正を敵ニ見透されさる事是無形を貴
ブ所之

神武帝の軍立ニも陰軍(メイクサ)陽軍(オイクサ)あり是全ク奇正
を用ヒられたる之可貴可思

第四巻終

110X
159
3